公益財団法人　日本ハンドボール協会 編
平成30年10月1日発行（毎月１回１日発行）　通巻584号

ハンドボール

10
OCT.2018
No.584





- ●第18回アジア競技大会
- ●おひりめJAPANトライアルゲームズ2018
- ●第７回女子ユース世界選手権
- ●第47回全国中学校大会

公益財団法人　日本ハンドボール協会

世界が驚く、物流をつくろう。

東京2020大会を、物流から支えていきます。

TOKYO 2020

ヤマトホールディングス

TOKYO 2020
PARALYMPIC GAMES

東京2020オフィシャル荷物輸送サービスパートナー

詳しくはこちら http://www.yamato-hd.co.jp/tokyo2020/ 世界が驚く、物流をつくろう。 検索



味の素㈱は「勝ち飯®」メニューを選手に提供することで、
東京2020オリンピック・パラリンピック日本代表選手団を応援しています。





＼ がんばる人のチカラになるごはん ／

勝ち飯®

オリンピック・パラリンピック日本代表選手団が、世界で勝つために。
味の素㈱は、独自の栄養プログラム「勝ち飯®」メニューで、
彼らのカラダづくりを支えています。

TOKYO 2020 AJINOMOTO TOKYO 2020 PARALYMPIC GAMES

東京2020オフィシャルパートナー
(調味料、乾燥スープ、アミノ酸ベース顆粒、冷凍食品)

ハンドボール 10月号 No.584



第18回アジア競技大会男女日本代表

CONTENTS

がんばれハンドボール 20 万人会「サポート会員」8 月入会・継続会員

【宮城】小林宏幸、大河原浩気【埼玉】岡部克則【千葉】康本拓史、黒田俊雄、小椋　薫、小　良子【神奈川】花岡美智子【山梨】栗原富貴子【富山】吉田容子、横嶋信生、横嶋好子【愛知】加藤ゆき、笹野邦雄【三重】長谷川幸司、長谷川峰代【岐阜】中島明美【大阪】田中幸二郎、久保幸子、白鳥貴子【兵庫】柿木國夫【奈良】立原真弓【佐賀】久保田秀光【熊本】井本光次郎【鹿児島】蔵元恵子

次号 11 月号（No. 585）は 11 月 1 日発行予定です。

スポーツ・インテグリティを守る



公益財団法人 日本ハンドボール協会 常務理事
指導普及本部長
三輪 一義

昨今、スポーツ界において〈スポーツ・インテグリティ〉という言葉が登場し、新聞紙上やテレビにおいて有識者やコメンテーターが「スポーツ・インテグリティを高める必要がある」と述べています。
スポーツ・インテグリティとは何を意味する言葉で、我々は何をすべきなのでしょうか？

SPORTS INTEGRITY とは

INTEGRITY を直訳すれば、「誠実」「正直」「高潔」「完全」という日本語が充てられ、「言行一貫」というニュアンスも意味づけられています。ここから、SPORTS INTEGRITY という言葉は、「スポーツの誠実性・健全性・高潔性が、様々な脅威により、欠けることがない価値ある状態」を指すとされています。『様々な脅威』とは、『ドーピング』、『体罰・暴力』、『ハラスメント』、『差別』、『八百長』、『ガバナンス・コンプライアンスの欠如』等が挙げられます。これらの脅威によってスポーツの価値が損なわれることがない状態を〈スポーツ・インテグリティ〉といい、スポーツ界はこの価値を守らなければなりません。

様々な脅威の実際例

このスポーツ・インテグリティと言う言葉が世間に登場したのは、2018 年 1 月に発覚したカヌー選手による禁止薬物混入事件が大きなきっかけになったのですが、その以前から、『ロシア国家ぐるみドーピング事件』『米国トレーナー性的暴行事件』などの海外での事案をはじめ、国内では『違法カジノ賭博事件（バドミントン）』『師弟ハラスメント問題（レスリング）』『体罰指導廃業（大相撲）』『性的指導事件（柔道）』『留学生審判暴力（バスケ）』『男子監督女子チーム批判（水球）』『アジア大会買春事件（バスケ）』など多数生じており、『日大アメフト問題』『ボクシング不祥事』『体操協会問題』は連日マスコミに取り上げられる社会問題にまで発展している現状にあります。

ハンドボール協会として

残念ながらハンドボールにおいても、『体罰指導問題』や『インターハイ大阪府予選での接触プレー』など、他競技の問題が他人事では済まされない現実が生じております。これらの背景には、勝利至上主義、行き過ぎた上意下達や集団主義、科学的合理性の軽視といった、日本のスポーツ界の悪しき体質・旧弊があると言われています。（6/15 スポーツ庁長官メッセージ）
ハンドボール協会としては、指導委員会を始めとする各種委員会の開催事業において、指導者講習会等の指導者養成のカリキュラムにスポーツ・インテグリティの学習プログラムを開設し、根絶に向けた草の根的取り組みを地道に根気よく継続していかなければならない必要性を強く感じています。

時代は移り、昔の常識は今の非常識に

江戸から明治大正を経て昭和に大きく時代が推移したように、昭和から平成を経て「新時代」に変異していこうとしている現代において、もう昔の常識は通用しません。指導上の科学的根拠はもちろんですが、社会的環境としての SNS の隆盛を止めることは誰にも出来ません。「拡散」や「炎上」という言葉が表すように、個人の意思とは全く異なる次元で情報が発信されていきます。
「誰が見ていようがいまいが、正しいことを、正しく行う。」これがインテグリティを守ることに繋がると考えます。
改めて、我々指導者は、選手の SNS 教育も含めて、勉強し直すことを皆様にお願いする次第です。

第18回アジア競技大会

開催期間：2018年8月13日～8月31日
開 催 地：インドネシア・ジャカルタ

日本男子試合結果

予選ラウンド星取表・グループB

	順位	KOR	JPN	PAK	勝	分	敗	総得点	総失点	得失点差	勝点
1.	韓国 (KOR)		26△26	47○16	1	1	0	73	42	31	3
2.	日本 (JPN)	26△26		38○15	1	1	0	64	41	23	3
3.	パキスタン (PAK)	16●47	15●38		0	0	2	31	85	-54	0

メインラウンド星取表・グループ1

	順位	QAT	JPN	KSA	IRQ	勝	分	敗	総得点	総失点	得失点差	勝点
1.	カタール (QAT)		24○17	28○23	26○20	3	0	0	78	60	18	6
2.	日本 (JPN)	17●24		26△26	27○24	1	1	1	70	74	-4	3
3.	サウジアラビア (KSA)	23●28	26△26		20△20	0	2	1	69	74	-5	2
4.	イラク (IRQ)	20●26	24●27	20△20		0	1	2	64	73	-9	1

■準決勝：バーレーン　31（15－9、16－11）20　日本
■3位決定戦：韓国　24（13－12、11－11）23　日本

日本女子試合結果

予選ラウンド星取表・グループB

	順位	JPN	THA	HKG	INA	MAS	勝	分	敗	総得点	総失点	得失点差	勝点
1.	日本 (JPN)		41○16	41○13	62○6	64○3	4	0	0	208	38	170	8
2.	タイ (THA)	16●41		30○24	34○16	40○12	3	0	1	120	93	27	6
3.	香港 (HKG)	13●41	24●30		35○11	40○15	2	0	2	112	97	15	4
4.	インドネシア (INA)	6●62	16●34	11●35		23○15	1	0	3	56	146	-90	2
5.	マレーシア (MAS)	3●64	12●40	15●40	15●23		0	0	4	45	167	-122	0

■準決勝：中国　32（13－15、19－16）31　日本
■3位決定戦：日本　43（20－6、23－8）14　タイ

最終順位

【男子】
優勝：カタール　2位：バーレーン　3位：韓国　4位：日本　5位：イラン　6位：サウジアラビア
7位：イラク　8位：香港　9位：チャイニーズタイペイ　10位：インド　11位：パキスタン
12位：インドネシア　13位：マレーシア

【女子】
優勝：韓国　2位：中国　3位：日本　4位：タイ　5位：北朝鮮　6位：カザフスタン
7位：香港　8位：インドネシア　9位：インド　10位：マレーシア

選手団名簿

男子

役職	名前	所属	
ヘッドコーチ	Dagur Sigurdsson	(公財)日本ハンドボール協会	
アシスタントコーチ	舎利弗　学	(公財)日本ハンドボール協会	
GKコーチ	北林　健治	(公財)日本ハンドボール協会	都城工業高等学校
ドクター	沖本　信和	(公財)日本ハンドボール協会	沖本クリニック
トレーナー	飯田　純一郎	(公財)日本ハンドボール協会	J・フロントライン

背番号	ポジション	名前	所　属	出身校
10	LW	杉岡　尚樹	トヨタ車体	中央大学
11	RB	東長濱秀希	大崎電気	日本体育大学
13	PV	笠原　謙哉	トヨタ車体	東海大学
16	GK	甲斐　昭人	トヨタ車体	日本体育大学
18	LB	成田　幸平	湧永製薬	大阪体育大学
20	RW	渡部　仁	トヨタ車体	日本大学
22	GK	坂井　幹	豊田合成	筑波大学
24	LB	信太　弘樹	大崎電気	日本体育大学
25	RW	元木　博紀	大崎電気	日本体育大学
27	PV	玉川　裕康	大崎電気	国士舘大学
30	RB	高智　海吏	トヨタ車体	大阪体育大学
31	LB	吉野　樹	トヨタ車体	明治大学
33	CB	東江　雄斗	大同特殊鋼	早稲田大学
34	LB	濵口　直大	トヨタ自動車東日本	国士舘大学
35	PV	小室　大地	大崎電気	日本体育大学
44	CB	門山　哲也	トヨタ車体	日本大学

女子

役職	名前	所属	
チームリーダー	田口　隆	(公財)日本ハンドボール協会	
ヘッドコーチ	Ulrik Kirkely	(公財)日本ハンドボール協会	
コーチ	櫛田　亮介	(公財)日本ハンドボール協会	三重バイオレットアイリス
トレーナー	高野内　俊也	(公財)日本ハンドボール協会	(一財)日本予防医学協会
分析	嘉数　陽介	(公財)日本ハンドボール協会	
総務	藤田　愛	(公財)日本ハンドボール協会	

背番号	ポジション	名前	所属	出身校
1	GK	飛田　季実子	ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング	大阪福島女子高校
2	PV	永田　美香	北國銀行	四天王寺高校
3	PV	角南　果帆	ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング	大阪体育大学
5	LB	塩田　沙代	北國銀行	高松商業高校
7	RW	藤田　明日香	Borussia Dortmund(GER)	四天王寺高校
9	CB	横嶋　彩	北國銀行	環太平洋大学
12	Gk	板野　陽	広島メイプルレッズ	大阪教育大学
13	LW	勝連　智恵	オムロン	宣真高校
15	RB	多田　仁美	三重バイオレットアイリス	日本体育大学
20	RB	秋山　なつみ	北國銀行	大阪体育大学
24	LB	原　希美	三重バイオレットアイリス	日本体育大学
25	CB	大山　真奈	北國銀行	大阪体育大学
28	PV	永田　しおり	オムロン	福岡女子商業高校
39	GK	寺田　三友紀	北國銀行	大阪体育大学
41	LB	河田　知美	北國銀行	大阪体育大学
81	CB	石立　真悠子	J．J．GANG	筑波大学

日本代表欧州遠征・アジア大会報告（2018）

男子日本代表ヘッドコーチ　Dagur Sigurdsson



欧州遠征（ドイツ・ポツダム）

我々はポツダム（ベルリンから1時間程度の距離）で欧州遠征をスタートさせました。地元ポツダムのクラブはとても良い受け入れ態勢を整えてくれていました。また、強化合宿期間中、ドイツ国内はとても熱い日が続きましたが、トレーニング施設・環境は大変素晴らしいものでした。2019年1月のミュンヘンでの世界選手権前に、ドイツで合宿をしたことはとても良い選択肢であったと思います。信太選手（怪我の為）と渡部選手（疾病の為）が合宿に参加できませんでしたが、（海外組である）徳田選手は合宿に参加することができました。我々は、今遠征における試合期に入る前に大変良いトレーニング（ランニング、ウェイトトレーニング、ハンドボール）を実施することができました。

■マグデブルグ戦

マグデブルグ（昨シーズン、ブンデスリーガ4位）とBettendorfにて試合をしました。1000人の観客が訪れ、チケットは売り切れでした。スターティングメンバーで臨む試合序盤で、とても良い立ち上がりを見せました。そして4点差でハーフタイムに入りました。後半に入り、マグデブルグは強さを示しましたが我々にとってはとても良い試合内容でした。

■ポツダム（30分マッチ）

我々はポツダムにてトーナメントに参加しました。

大会はとても良くオーガナイズされており、DHB（ドイツハンドボール連盟）のAndreasMichelmann会長やBobHanning副会長も会場に姿を見せました。

最初の30分、我々はポツダム（3部リーグ所属）と対戦し、大変良く集中したパフォーマンスを見せ、勝利を収めることができました。

■フクセ・ベルリン（30分マッチ）

後半（30分）はフクセ・ベルリン（昨シーズン、ブンデスリーガ3位）と試合をしました。この試合も開始20分はとても良い試合が出来ました。その後、フクセ・ベルリンは強さを見せつけてきました。

■ライプツィヒ

とても残念なことに、今遠征最後の練習において杉岡選手が負傷してしまいました。それにより、彼は次の試合（ライプツィヒ戦）に出場することができず、アジア大会についても欠場することになりました。今遠征最後の試合となったライプツィヒ戦には550人のライプティヒファンが試合に駆けつけていました。我々は長期合宿により疲弊していました。ミスが多く、ゲームコントロールに欠けていました。しかし、結果はまずまずのものでした。

今遠征を通じて、我々は良いディフェンスとGKのパフォーマンスを示すことができました。

若手GKの坂井選手は、大きな可能性を見せてくれました。彼は出来るだけ多くの経験を積んでいかなければいけません。彼がGKコーチから専門的なサポートを受け、また、数多くの異なる種類のシューター / チームと対戦することはとても大切なことだと考えます。

甲斐選手もこの2年の間でベストな状態でした。

我々のディフェンスは6－0DF（ディフェンシブ）、6－0DF（オフェンシブ）、5－1DFを試みました。

日本に戻り2日間の休息の後、インドネシア、ジャカルタへ発ちました。

アジア大会

参加不可の選手：土井杏利選手、徳田新之助選手、稲毛隆人選手、部井久アダム勇樹選手（欧州クラブ在籍組）、木村昌丈選手、杉岡尚樹選手（怪我の為）

■パキスタン戦

楽な試合展開でした（大会を通じてこの試合だけがイージーゲーム）。全ての選手がコートに立つことが出来ました。そのことは、厳しい試合が予想される次節からの試合に向けて良い準備となりました。

■韓国戦

9時からの試合開始の準備として、我々は朝6時起床・体操を6日間行っていました。我々は大変良いディフェンスが出来、またGK坂井選手も強いパフォーマンスを見せてくれました。我々の実力は韓国に接近し、対韓国戦に対して自信をつけています。勝利は遠い存在ではないことを感じています。

まだまだ若手選手はゲームの終わらせ方を学ぶ必要があ

ります。しかし、今後高いレベルの試合を多く経験することによって、それは補えると確信しています。

■サウジアラビア戦

彼ら（サウジアラビア）は経験豊富であり戦い方を熟知しているので、とても難しい相手でした。

後半、追いかける展開となってから選手たちはとても良い成果を示してくれました。ディフェンスシステムを変え、リスクを負って（7対6）を仕掛けました。

■イラク戦

前半は我々のリズムを掴むことは出来ませんでしたが、後半になって巻き返しに成功しました。選手は勝利への強い精神力を見せてくれました。

■カタール戦

カタール戦に向けたバスの車内で、我々はイラク対サウジアラビア戦の結果を知りました。そして、準決勝進出を確かなものとしました。素晴らしい成果であり、我々はカタール戦に向けて通常とは違った方法で臨みました。

我々は３試合連続でほぼ同じメンバーで試合をしていました。ですので、この試合については他の選手に出場機会を与えることができる良いチャンスでした。

甲斐選手にとっては、とても素晴らしい試合となりました。我々は勇敢に戦いました。そして、私はそれをとても嬉しく思いました。

■バーレーン戦

大会を通じてこの試合だけは全く満足が出来ませんでした。

良いスタートを切りましたが、残念なことに、この日は我々のGKが充分ではありませんでした。その一方で、バーレーンのGKはとても強いパフォーマンスでした。戦術的には、我々は良いスタートを切りましたが、多くのボールをマイボールにすることが出来ず、それゆえ、速攻に結びつけることができませんでした。ポジション攻撃から点数を取ることが難しい状況でした。

■韓国戦

この試合はとてもタフな試合となりました。攻守両面で良い試合であり、とてもエキサイトした状況でした。我々は良い試合を展開しましたし、最後まで決して諦めませんでした。選手は「試合をコントロール出来る。」と感じています。そして、我々のディフェンスはより強固になってきましたし、これによりGKはより良いパフォーマンスを発揮することができます。これらは、攻撃においても（ディフェンスが良いので）プレッシャーを感じなくて済むということを意味しています。

メダルを獲得できなかったことは残念ですが、その一方でチームが示してくれたパフォーマンスについては大変誇りに思っています。大変厳しい試合の連続でしたが、チームは大会を通じて大きな成長を見せたと思います。もちろん、私は選手が自身やチームの成長を感じていることに嬉しさを覚えます。

現在、アジアのハンドボール情勢では３位～８位のチーム間のレベルの差が、とても拮抗していると思います。ですので、我々は懸命に努力を続け、現在のポジションをキープすると同時にカタールやバーレーンなどのトップチームにチャレンジしていかなければいけません。現在、我々は実力のある良い対戦相手とマッチメークをしつつ、ゲーム戦術やゲームをコントロールする方法を学び続けています。今、我々は数多くの試合経験を積みつつ、ディフェンスのバリエーションを増やし、また、更なる良い結果を得るために正しい方法でプレーをしなければいけません。今大会、劣勢な状況から逆転勝ちや同点に持ち込めた理由は、経験値が上がりプレーの選択肢が広がったことによります。時折、我々は戦術的好機を作りましたが、そこでも、選手たちは問題なく成し遂げました（選手たちは「試合展開を好転することができる。」と信じていました）。

チーム力は安定してきました。そして、我々のシステムを崩すことはより難しくなってきています。我々は今、大きなパニックを起こすことなくゲームに順応出来るようになってきました。なぜならば選手たちは、ゲームの中で再度良い状態に戻れるチャンスがあるということを感じているからです。今、我々は自信を持ち、チャンスを作ることができます。初夏には５週間に渡りトレーニングと試合を重ね、その後さらに５週間以上（２週間ヨーロッパ。３週間インドネシア）に渡り、高いレベルでたくさんの試合を重ねてきました。

我々には、極めて重要な経験を重ねていく、多くの若手有望選手（杉岡選手、吉野選手、アダム選手、東江選手、徳田選手、玉川選手、坂井選手）がいます。

しかしまた、新たなポジションに挑戦しているキープレーヤー（成田選手：左サイド、渡部仁選手：右バック、笠原選手：ライン）もいます。ですので、時間と我慢が必要です。近い将来、ディフェンスとオフェンス、攻守に渡りチームのバランスは更に良くなっていくでしょう。我々は、懸命に努力を続けなければいけません。そして、次のステップに前進すると確信しています。

10月にフィンランド・スウェーデンにて行われる合宿がとても大切になってくるでしょう。世界選手権までは少しの時間しかありませんので、選手はトップコンディションで（10月を）迎えなければいけません。

欧州遠征（ドイツ・ポツダム）試合結果

■8月1日
日本代表　21（10–14、11–19）33　SCMagdeburg（昨季ブンデスリーガ1部・4位）
得点者：徳田6点、元木6点、東江4点、吉野3点、笠原1点、成田1点

■8月3日（30分×2本の変則マッチ）
日本代表　17–12　VfLPotsdam（ブンデスリーガ3部所属）
得点者：徳田5点、元木5点、杉岡2点、東江2点、吉野2点、高智1点

日本代表　13–17　FüchseBerlin（昨季ブンデスリーガ1部・3位、ヨーロッパカップ優勝）
得点者：徳田4点、東江2点、元木2点、濱口1点、吉野1点、杉岡1点、門山1点

■8月7日
日本代表　23（12-17,11-12）29Leipzig（ブンデスリーガ1部・昨季7位）
得点者：徳田6点、東江4点、高智3点、吉野2点、濱口2点、東長濱2点、玉川1点、門山1点、笠原1点、元木1点

アジア大会を終えて

男子日本代表　信太 弘樹

今回、ジャカルタで開催されたアジア大会では目標としていたメダルを取ることができず、４位という悔しい結果になりました。

予選ラウンドは、１戦目のパキスタン戦に 38 対 15 で勝利し、２戦目の韓国戦は前半から一進一退の攻防となりましたが、後半途中から日本がリード。しかし、終盤に追いつかれ 26 対 26 で引き分け。１勝１分で韓国との得失点差によりグループ２位でメインラウンドへ。

メインラウンド１戦目のサウジアラビア戦は、後半 10 分で相手に５点リードされる厳しい状況の中、終盤に追いつき 26 対 26 で引き分け、勝ち点１を獲得。２戦目のイラク戦は、前半３点リードされ折り返すも、後半に入り堅い守りから確実に得点を重ね 27 対 24 で勝利し、勝ち点２を獲得しました。そして、日本は最終戦のカタール戦を前に同組のサウジアラビアとイラクが引き分けた為、準決勝進出が決定しました。最終戦のカタール戦は、主力を温存しつつ戦い、後半相手に引き離され 17 対 24 で敗戦。

準決勝は、グループ２を１位で通過したバーレーンと対戦。序盤から相手のペースで試合は進み、前半で６点差。後半に入っても流れを変えることができず、20 対 31 で敗戦。

３位決定戦は予選で引き分けた韓国と対戦。予選と同様に前半から両チームとも一歩も譲らず、日本１点ビハインドで後半へ。後半も日本はキーパーの好セーブから粘りの攻撃で得点を重ねるも、１点に泣き 23 対 24 で敗戦。メダルには届きませんでした。

１月のアジア選手権では、自分たちのハンドボールを表現できずに５位という結果に終わり、自分たちのハンドボールを見失いそうになっているのを感じました。それに選手それぞれが迷いながらプレイしているようにも見えました。しかし、６月のドイツ戦やブラジル戦、７月のドイツ遠征を経験したことによりチームとしても個人としてもステップアップできたと思います。それがチーム全体に良い流れを作り、今大会では自分たちのハンドボールを徹底することができていました。タフな試合が続きましたが、負けそうな状況でも引き分けに持ち込んだり、逆転して勝利したりとチーム全員で戦えているのを感じました。それは私だけではなく、選手１人１人が感じたはずです。結果として日本は、準決勝で敗れ、３位決定戦でも敗れ、メダルを逃しました。チャンスがあっただけにとても悔しい思いもあったし、応援してくださる沢山の方々の為にもメダルを取りたかった。しかし、結果は出せなかったが、ポジティブに考えれば今大会は、チームとしてもう一段ステップアップできたと感じました。それは１月の世界選手権に向けてものすごくプラスになったと思います。

本当に沢山の応援ありがとうございました。いつも皆さんの声援が力となっています。今後も引き続き彗星 JAPAN を宜しくお願い致します。

アジア大会報告（2018）

女子日本代表ヘッドコーチ　Ulrik Kirkely

日本のハンドボール仲間の皆様

女子代表チームはこの夏、アジア競技大会へ向けて、5月から8月にかけて日本とデンマークで合計約9週間の合宿を行い、準備しました。

いつも通りフィジカルトレーニングにも大きなフォーカスを置きながら、攻防両面で新たな戦術も導入しました。練習試合など11試合を戦い、それに加えてヨーロッパのチームや選手達との練習の中でのミニゲームを多く実施し、非常に価値のある機会となりました。

日本では、6月のJAPAN CUP高崎でのポーランドとの対戦、8月のおりひめJAPANトライアルゲームズ2018（熊本）でのニュークビン・ファルスター、オムロンとの対戦の機会があり、たくさんの日本のファンの皆様の前でプレーできたことも、貴重な経験となりました。ありがとうございました。

ジャカルタには3週間滞在し、計6試合を戦いました。予選グループBでのタイ、香港、マレーシア、インドネシアに4戦4勝し、予選グループ1位で準決勝へ進みました。予選ではどれも速攻を中心に大量得点し、点差の開く展開となりましたが、試合前にはいつも通り細かい目標設定をし、自分たちのプレーに集中し、60分間全力で戦い続けるということを大切にしました。

準決勝の中国戦では、予選と比較して相手が強く、大きくなるため、最善の準備を尽くしました。前半途中では6対10と4点リードを許す場面もありましたが、ディフェンスシステムの変更などで立て直し、前半を終えて15対13の2点リードでハーフタイムを迎えました。後半戦も一進一退の攻防が続き、なんとか3点リードを保ったものの、ラスト10分にディフェンスが機能せず逆転を許してしまい、1点差で負けてしまいました。

目標としていた決勝進出ができなかったことについては、チーム全員、悔しい思いをしました。

今はこの悔しさを忘れず、冷静に試合の反省をし、次回以降の合宿や12月の熊本でのアジア選手権で課題克服に向けてチーム全員で取り組んでいきたいと思っています。

最後になりましたが、ご支援くださいました関係者の皆様に心からお礼を申し上げるとともに、今後とも温かいご支援を賜れますよう、よろしくお願いいたします。

アジア大会を振り返って

女子日本代表主将　原　希美

まずはじめに、アジア競技大会出場にあたりご尽力いただきました関係者の皆さまに、心からお礼申し上げます。

今回、アジア競技大会に出場するにあたり、私たちは金メダルを目標に準備を重ねてきました。

しかし、結果は準決勝で中国に敗れ銅メダルとなり、目標としていた色のメダルは獲得することができませんでした。予選グループでの4試合は、力の差がある国との試合になりましたが、試合ごとに目標を決め、試合の中での会話、集中力を大切にし、戦い抜くことができました。準決勝の中国戦では、大きい相手に対し受け身になってしまい、日本の武器である機動力を生かしたディフェンスの良さを発揮しきれず、敗戦となってしまいました。

今大会の試合日程は連戦がなく、試合と試合の間が1日～3日空くなど、あまり経験したことのない日程でコンディション維持、調整など難しい部分がたくさんありました。しかし、どんな環境においても、選手として常にベストパフォーマンスのできる状態でいることがとても大切で、それが選手としての責任であると改めて強く感じました。

また選手村では、日本選手団の他競技の方々と挨拶を交わしたり、会話したり、互いにエールを送り合ったり、他競技の選手の試合結果を知ることで「私たちも頑張らなきゃ！」とたくさんの刺激をもらいました。他競技の選手との交流は、アジア競技大会やオリンピックなどの大会でしか経験できないことなので、このような貴重な経験をさせていただき本当に感謝しております。

今年の11月末から12月には、熊本で女子アジア選手権が行われます。アジア競技大会での悔しさをこのアジア選手権で晴らせるよう、課題と向き合って頑張っていきたいと思います。たくさんの応援ありがとうございました。

男子：アジア競技大会過去の結果

回	会期	会場	備考	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位	11位	12位	13位	14位	15位
1	1982	ニューデリー	8カ国	中国	日本	韓国	クウェート	サウジアラビア	UAE	バーレーン	インド							
2	1986	ソウル	6カ国	韓国	中国	日本	クウェート	イラン	香港									
3	1990	北京	6カ国	韓国	日本	サウジアラビア	中国	北朝鮮	UAE									
4	1994	広島	5カ国	韓国	日本	中国	クウェート	サウジアラビア										
5	1998	バンコク	8カ国	韓国	クウェート	日本	イラン	UAE	中国	カタール	タイ							
6	2002	プサン	9カ国	韓国	クウェート	カタール	日本	タイペイ	バーレーン	中国	UAE	モンゴル						
7	2006	ドーハ	15カ国	クウェート	サウジアラビア	イラン	韓国	シリア	日本	バーレーン	サウジアラビア	レバノン	UAE	中国	インド	香港	ウズベキスタン	マカオ
8	2010	広州	11カ国	韓国	イラン	日本	サウジアラビア	カタール	バーレーン	中国	クウェート	インド	香港	モンゴル				
9	2014	インチョン	14カ国	カタール	韓国	バーレーン	イラン	クウェート	オマーン	サウジアラビア	タイペイ	日本	中国	香港	モンゴル	UAE	インド	
10	2018	インドネシア	13カ国	カタール	バーレーン	韓国	日本	イラン	サウジアラビア	イラク	香港	タイペイ	インド	パキスタン	インドネシア	マレーシア		

女子：アジア競技大会過去の結果

回	会期	会場	備考	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
1	1990	北京	6カ国	韓国	中国	タイペイ	北朝鮮	日本	香港				
2	1994	広島	4カ国	韓国	日本	中国	カザフスタン						
3	1998	バンコク	6カ国	韓国	北朝鮮	日本	中国	カザフスタン	タイ				
4	2002	プサン	5カ国	韓国	カザフスタン	中国	日本	北朝鮮					
5	2006	ドーハ	8カ国	韓国	カザフスタン	日本	中国	タイペイ	ウズベキスタン	タイ	インド		
6	2010	広州	9カ国	中国	日本	韓国	カザフスタン	北朝鮮	タイペイ	タイ	インド	カタール	
7	2014	インチョン	9カ国	韓国	日本	カザフスタン	中国	ウズベキスタン	香港	タイ	インド	モルジブ	
8	2018	インドネシア	10カ国	韓国	中国	日本	タイ	北朝鮮	カザフスタン	香港	インドネシア	インド	マレーシア

おりひめJAPAN トライアルゲームズ2018

【出場チーム】
女子日本代表（おりひめJAPAN）
ニュークビン・ファルスターHK（デンマーク）
オムロン・ピンディーズ

【日時及び対戦】
■8月5日（日）
エキシビションマッチ 高校女子 熊本県選抜 vs 岡山県選抜
ニュークビン・ファルスターHK vs オムロン
■8月7日（火）
日本代表 vs オムロン
■8月8日（水）
日本代表 vs ニュークビン・ファルスターHK

【会場】
八代市総合体育館、熊本県立総合体育館

女子日本代表「おりひめ JAPAN トライアルゲームズ 2018」メンバーリスト

役職	名前	所属	
監督	Ulrik Kirkely	（公財）日本ハンドボール協会	
コーチ	櫛田　亮介	（公財）日本ハンドボール協会	三重バイオレットアイリス
トレーナー	高野内　俊也	（公財）日本ハンドボール協会	（一財）日本予防医学協会
トレーナー	岩谷　美菜子	（公財）日本ハンドボール協会	ながい接骨院
分析	嘉数　陽介	（公財）日本ハンドボール協会	
総務	藤田　愛	（公財）日本ハンドボール協会	

背番号	ポジション	名前	所属	生年月日	身長	出身校
1	GK	飛田　季実子	ソニーセミコンダクタマニファクチャリング	1977.09.26	170	大阪福島女子高校
2	PV	永田　美香	北國銀行	1994.05.28	180	四天王寺高校
3	PV	角南　果帆	ソニーセミコンダクタマニファクチャリング	1993.01.05	166	大阪体育大学
5	LB	塩田　沙代	北國銀行	1989.03.21	172	高松商業高校
7	RW	藤田　明日香	ソニーセミコンダクタマニファクチャリング	1996.02.14	167	四天王寺高校
9	CB	横嶋　彩	北國銀行	1990.07.03	162	環太平洋大学
10	LW	勝連　智恵	オムロン	1989.04.14	158	宣真高校
12	GK	板野　陽	広島メイプルレッズ	1993.02.02	174	大阪教育大学
13	LW	勝連　智恵	オムロン	1989.04.14	158	宣真高校
15	RB	多田　仁美	三重バイオレットアイリス	1991.10.13	166	日本体育大学
20	RW	秋山　なつみ	北國銀行	1994.07.23	161	大阪体育大学
24	LB	原　希美	三重バイオレットアイリス	1991.03.09	170	日本体育大学
25	CB	大山　真奈	北國銀行	1992.12.07	165	大阪体育大学
28	PV	永田　しおり	オムロン	1987.10.24	171	福岡女子商業高校
35	RW	髙宮　咲	HC 名古屋	1992.10.13	160	大阪教育大学
39	GK	寺田　三友紀	北國銀行	1987.01.06	170	大阪体育大学
41	LB	河田　知美	北國銀行	1990.06.30	160	大阪体育大学
81	CB	石立　真悠子	JJGANG	1987.01.18	166	筑波大学

ニュークビン・ファルスターHK　32(16−15、16−13)28　オムロン

　オムロンのスローオフで前半開始。序盤から点の取り合いとなり、オムロンは相沢、吉田、松尾のシュートが次々と決まる。ニュークビンもアンナのポスト、クリスティーナのカットインで得点を重ね、前半15分には11対8とオムロンをリードする。しかし、オムロンも相手のポストプレーを必死に阻止し、相手のパスミスからの速攻で18分には12対11と逆転する。その後も両チームとも一進一退の攻防を展開し、ニュークビンが16対15と1点リードして前半を折り返す。

　後半も互いに点の取り合いで10分過ぎまでシーソーゲームとなる。しかし、徐々にアンナのポストプレーからの得点や7mTによりニュークビンがリードを広げていく。オムロンも吉田の7mTや松本のサイドで反撃するも、途中出場のニュークビンケーラのサイド、クリスティーナが確実に7mTを決めてオムロンを突き放し、32対28でニュークビンが勝利した。





日本代表(おりひめJAPAN)　37(20−11、17−12)23　オムロン

　日本代表のスローオフで前半スタート。両チームともスピーディーな展開で序盤から点の取り合いとなる。日本代表は勝連のサイド、オムロンは松本の速攻などで次々とゴールを決める。日本代表は、タイムアウトの後、多田のカットインを皮切りに4連続得点でオムロンを引き離す。オムロンも吉田のロングで応戦するも、日本代表は原、永田の堅守からの速攻や7人攻撃など多彩な攻撃で6連続得点を重ね、20対11と日本代表のリードで前半を終了。

　後半立ち上がり、4連続得点の日本代表が主導権を握る。日本代表は、GK寺田の好セーブからスピードのある展開で速攻、ロング、カットイン、ポストプレーなど多彩な攻撃を展開し、着実に得点を重ねる。一方、オムロンはチームの柱・吉田がロングシュートやカットインなどで13得点と奮闘するも、最後まで日本代表の堅い守りを破れず、徐々にリードを広げられ、37対23で日本代表がオムロンに快勝した。





日本代表（おりひめJAPAN） 24(12−11、12−10)21 ニュークビン・ファルスターHK

ニュークビンのスローオフで前半開始。互いに固い守りで試合が進むが、前半３分に日本代表・横嶋のシュートが決まり得点が動き出す。ニュークビンはクリスティーナが３本の 7mT を含む６得点と活躍。一方日本代表は、GK を外した７人攻撃で得点を重ね、守っては GK 板野の再三のファインセーブでニュークビンを常にリードする。ところが前半終了間際、日本代表 GK 板野がシュートを阻止しようとして相手選手と接触する重大なファールにより失格となるハプニングが発生。日本代表は後半に不安を残すことになったが、12 対 11 と１点リードで前半を折り返す。

後半立ち上がり日本代表が３連続得点で４点差とし主導権を握る。後半５分過ぎからニュークビンはヨハナのミドルが決まりだし反撃開始。最大５点差を徐々に詰め、後半 20 分には１点差に追い上げる。その後は互いに点の取り合いになり、シーソーゲームを展開するが、日本代表は要所でこの試合９得点を決めた横嶋が活躍、守備では GK 飛田が終盤勝負を左右する大事な場面で相手の 7mT を阻止し、追い上げるニュークビンを振り切り、24 対 21 で日本代表が勝利した。



(C) Japan Handball Association


(C) Japan Handball Association



(C) Japan Handball Association



(C) Japan Handball Association

第7回
女子ユース世界選手権

開催期間　2018年8月7日〜8月19日
開 催 地　ポーランド

最終順位

優勝：ロシア	13位：ポーランド
2位：ハンガリー	**14位：日本**
3位：韓国	15位：オーストリア
4位：スウェーデン	16位：チュニジア
5位：ドイツ	17位：モンテネグロ
6位：デンマーク	18位：チリ
7位：オランダ	19位：スロバキア
8位：スペイン	20位：アルゼンチン
9位：ルーマニア	21位：アンゴラ
10位：フランス	22位：中国
11位：ノルウェー	23位：エジプト
12位：クロアチア	23位：カザフスタン



日本代表メンバーリスト

役職	氏名	所属	
団長	稲福貴史	(公財)日本ハンドボール協会	東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
監督	田中潤	(公財)日本ハンドボール協会	県立高松商業高等学校
コーチ	安藤希沙	(公財)日本ハンドボール協会	佼成学園女子高等学校
ドクター	松村健一	(公財)日本ハンドボール協会	多根総合病院
トレーナー	木村慎之介	(公財)日本ハンドボール協会	木島病院
アナリスト	田口真夕	(公財)日本ハンドボール協会	東海大学

背番号	名前	所属	出身校
1	千葉夏希	不来方高等学校	花巻北中学校
2	橋口和佳奈	佼成学園女子高等学校	松橋中学校
4	辻野桃佳	大阪体育大学	神戸星城高等学校
5	阿部美幸	早稲田大学	佼成学園女子高等学校
6	伊藤愛莉	関西学院大学	名経大市邨高等学校
7	服部沙也加	四日市商業高等学校	南中学校
9	安田つぐみ	富岡東高等学校	富岡南中学校
10	岡田彩愛	高水高等学校	平田中学校
12	榊真菜	東京女子体育大学	市立高津高等学校
13	抜水うらら	大阪体育大学	鹿児島南高等学校
14	平野宗香	日川高等学校	山梨北中学校
15	谷藤悠	不来方高等学校	厨川中学校
16	柿添まどか	明光学園高等学校	玉名中学校
17	紅林詩乃	早稲田大学	佼成学園女子高等学校
18	江本ひかる	高水高等学校	岩国中学校
19	宇治村唯	今治東中等教育学校	今治東中等教育学校
20	守屋葵	川崎市立高津高等学校	横浜市立岩崎中学校
21	上田遥歌	東海大学	大同大学大同高等学校



戦　評

■予選ラウンド

オランダ　33（16 − 14、17 − 16）30　日本

日本の初戦の相手はオランダ。試合開始早々オランダ No.4 に 7mT を取られ、きっちりと決められるが、日本はすぐに岡田のカットインで同点とする。その後、伊藤のミドル、岡田のカットイン、阿部の１対１などで一進一退の攻防が続くが、23 分日本が 13 対 12 とこの試合初めてリードをする。その後も DF でオランダのミスを誘い、14 対 12 と点差を広げた。しかし、ここから日本は攻撃でミスが連発し、オランダに４連取されて前半を終える。ハーフタイムで DF の修正と、７人攻撃の確認をして後半に臨んだ。

後半早々、日本は退場者を出して点差を広げられる。早く追いつきたい日本は８分 17 対 21 とされた所で、紅林を投入し７人攻撃を仕掛ける。しかし、７人攻撃は決まるが、オランダにすぐ点数を決められるという苦しい展開が続いた。何とか食らいつき、24 分宇治村のサイドで 27 対 28 と１点差まで詰めよる。しかし、残り４分 30 秒にノーマークを作るもシュートが決まらず、相手にシュートを決められてしまう。何とか守屋のサイドで１点返すがタイムアップ、30 対 33 で惜敗した。バックプレーヤーの岡田、伊藤、阿部の３人が果敢に攻めにいったが一歩及ばず悔しい結果となった。この試合の日本の MVP は 13 得点を挙げた岡田が獲得した。

日本　26（14 − 10、12 − 13）23　アルゼンチン

日本の第２戦はアルゼンチンと対戦。アルゼンチンの力強いプレーに圧倒され、警告・退場と劣勢が続く。前半８分 50 秒２対６と離された所でタイムアウトをとり、DF の修正と確認をおこなった。日本は DF を修正するために、守屋を投入。これが功を奏し相手のミスを誘う。また GK・柿添も当たりだし、一気に４連取に成功。23 分には９対８と逆転に成功した。攻撃では岡田に対する厚いマークを利用して、伊藤がタイミングをずらしたミドルを要所で決め、相手 DF が翻弄されて２人退場し４人に。相手のミスから平野、伊藤、上田、谷藤が速攻で走り、前半を 14 対 10 で終える。

後半、相手の No. ４の強烈なランニングシュートが炸裂する。分かっていてもなかなか止めることができない。少しずつリズムが崩され、日本もテクニカルミスやシュートミスが続き、18 分 23 対 17 となった所で、相手が２人退場するも得点を挙げることができず、逆に退場者を出すなど、日本に焦りが出始めた。24 分 23 対 20 とされたところで、チームタイムアウトをとり、攻撃の確認と相手 No. ４に対する DF の確認を行った。これでリズムを取り戻した日本は、27 分過ぎに３回 7mT を獲得するが、ことごとく外す。結果 26 対 23 で今回初勝利となったが、ゲームの入り方、ゲーム中で DF を修正することへの課題が残った試合であった。このゲームの日本の MVP は伊藤が獲得した。

ロシア　31（17 − 8、14 − 9）17　日本

日本の第３戦目は、攻撃の真ん中４人が 178cm 以上というロシアと対戦。日本はその迫力に圧倒され、ミスを連発。それを速攻にもっていかれ一気に０対６と先行される。そこですかさずチームタイムアウトをとり、攻撃の修正を行った。タイムアウト後、日本は７人攻撃を仕掛け、阿部のカットイン、谷藤のサイドで点をとる。しかし、そこからロシアの 178cm の長身キーパーに３本連続ノーマークシュートとられ波に乗れない。我慢の時間が続いたが、20 分過ぎから DF で上田、守屋、紅林がだんだん相手のスピードとパワーに慣れてきて、ミスを誘えるようになってきた。また、GK 柿添も当たりだし、宇治村の速攻で加点するが、８対 17 で前半を折り返す。

後半に入ってもロシアの勢いは止まらない。岡田の速攻、伊藤のミドルで応戦するが、流れは変わらない。結果 17 対 31 で敗戦した。日本の高校生、大学生では考えられないほどの身長とフィジカルの強さを実感した。この経験をこれからどう生かすかが、この試合を経験した選手の今後の課題である。この試合の MVP は岡田彩愛が獲得した。

ノルウェー　29（14 − 13、15 − 10）23　日本

日本の第 4 戦はノルウェーとの対戦。開始早々相手の No.22 に強烈なアウト割りを決められるが、すかさず日本も伊藤のミドルで応戦。その後相手に 2 連取されるが、ここから日本の DF が機能する。平野、守屋、上田、谷藤の積極的な DF からカットや、GK 榊のナイスセーブ、谷藤のサイドもあり、一気に 7 連取し 8 対 4 とリードする。9 対 5 とした 14 分過ぎにノルウェーがチームタイムアウトを要求、ここから相手が日本の積極的な DF に対応してくる。ジリジリと点差を縮められ、27 分ついに逆転され、前半を 13 対 14 で終える。

後半、日本は OF でミスを連発。その間に相手に 3 連取されてしまう。離されたくない日本は、紅林を投入し 7 人攻撃を仕掛ける。GK 柿添のナイスセーブもあり、点差を縮めたい日本だったが、ノーマークは作るがシュートを決めきることができない。平野、岡田、阿部のナイスカットから速攻で応戦するも 23 対 29 でタイムアップとなった。ロシア戦の経験が今回 DF 面で積極的に仕掛けられた要因である。あと一歩踏ん張れれば、もうひと波もふた波を呼び寄せられたゲームだっただけに悔しさが残る。この試合の日本の MVP は谷藤悠が獲得した。

日本　26（14 − 9、12 − 11）20　中国

日本の第 5 戦は中国と対戦。これに勝てば決勝トーナメント進出となる大一番。試合開始早々から日本は積極的な DF から相手のミスを誘い、谷藤のサイド、伊藤のミドル、岡田のカットイン、守屋の速攻などで一気に 6 対 2 と主導権を握る。そこで中国がチームタイムアウトを取るが、日本の勢いは止まらず、上田、守屋の DF から平野のサイド、阿部のカットイン、紅林を投入した 7 人攻撃などで前半を 14 対 9 で終える。

後半、相手は 6-0DF から 5-1DF に変えてくるが、日本の勢いは止まらず。宇治村、安田の速攻で確実に加点する。守っては服部、辻野が粘り強い DF を展開、GK 榊、柿添も要所でナイスセーブを連発した。結果、26 対 20 で勝利し、決勝トーナメント進出を決めた。試合を重ねるごとに、世界との戦い方を選手達が理解してきている。次は D リーグ 1 位の韓国との対戦。粘り強い DF を発揮したい。

■エイトファイナル

韓国　36（20 − 15、16 − 15）30　日本

決勝トーナメント初戦は韓国と対戦。日本は最初からタイムアップまで 7 人攻撃を展開する。開始早々動きの硬い日本に対し、韓国は巧みな組織プレーで日本を圧倒する。0 対 3 となったところで日本はチームタイムアウトをとるが、動きの硬さはとれない。このまま離されてしまうのかという雰囲気が流れたが、7 分 1 対 6 とされた所で、紅林のポストをきっかけに 7 人攻撃が決まりだす。上田のポスト、谷藤のサイド、伊藤のミドル、阿部のカットインと OF が機能してきたと同時に、DF でも上田、守屋、谷藤が韓国の攻撃に慣れて、ナイス DF で相手の攻撃を止め始める。20 分過ぎから韓国は岡田にマンツーマンを仕掛けるが、日本は怯まなかった。前半 28 分からは平野、岡田の速攻などで 4 連取、前半を 15 対 20 で終える。

後半、日本の勢いは止まらなかった。紅林のポストで相手を退場とし、阿部のミドルでの連取などもあり、9 分 22 対 24 と追い上げる。相手も 7 人攻撃を展開するが、日本の GK 榊のナイスセーブや、上田、守屋の DF で相手の OF を封じる。一進一退の攻防が続くが、大事な場面でシュートが枠を捉えられない。日本は辻野、服部、宇治村を交代で投入、GK 柿添、榊のナイスセーブもあったが、30 対 36 で敗れた。後半には競りあう場面が多かったが、大事なシュートを決めることができなかったことと、前半のスタートの入りの悪さが悔やまれる敗戦となった。この試合の日本の MVP は阿部美幸が獲得した。

■ 9-16 位決定戦

ポーランド　22（12 − 10、10 − 9）19　日本

最終戦は地元ポーランドと対戦。地元の大応援団の中試合は始まった。開始早々日本は、上田のポストプレーで 7mT を獲得し、それを岡田が確実に決めた。そこから一進一退の攻防が続く。相手が鋭いミドルを決めれば、日本は伊藤のミドル、谷藤のサイド、阿部のカットインなどで応戦する。しかし 17 分 7 対 8 から日本がことごとくシュートを外してしまう。しかし、相手も日本の GK 榊の好セーブに阻まれ、前半 10 対 12 の 2 点差で終える。

後半、岡田がカットから速攻で 11 対　12 とする。日本は紅林を投入して 7 人攻撃を仕掛けるが、そこから 5 本連続シュートをミス、それを得点につなげられて 12 対 16 となる。しかし、ここで相手が 3 人連続退場となる。相手が 3 人、4 人、5 人の時間が続き、上田のポストや阿部のカットインで応戦し、21 分 45 秒に 18 対 18 の同点に追いつく。必死の DF を展開するが、速攻でのパスミス、シュートミスが続きどうしてもあと 1 点が取れない。徐々に焦りが出てきた日本。結果 19 対 22 で悔しい敗戦となった。 1 点差、 2 点差、 3 点差という場面が随所にあったが、そういう所で決定打を欠き、波に乗り切れない試合であった。勝ち切れない悔しさを痛感した今大会であった。この試合の日本の MVP は上田遥歌が獲得した。

World Women's Youth Championship in Poland

～シンプルで、明確な競技規則８条～

太田智子・島尻真理子



2020 年に向けて、そして、それ以降に日本のハンドボールが強く、より発展していくために、私たちは任務を果たして行きたいと思っています。私たちはユース世界大会に参加したのは３回目。一番の衝撃は、シニアクラスの体格とスピード、コンタクトの強さです。ユースは U18 世代。今までは身長やスピード、体の作りがまだ若い感じを受けていましたが、今大会はシニアとほぼ変わらないタフさとハードさがありました。（特にヨーロッパ勢）

最初に、現在 EHF のハンドボールがメディアや SNS 上で気軽に見ることができ、現状ではヨーロッパ勢がどのカテゴリーでも上位を占めている結果になっています。ただ、レフェリングにおいて EHF で判定されている事全てが正しいわけではありません。今大会の Referee Meeting の最初に EHF の試合に関しての多数のクリップを用いて指導がありました。ルールは一つ。それぞれの国や地域で違ったルールを適用してはならない、毅然として一つのルールに準じて取りくむ旨の指導を受け、国際トップレフェリーとして 15 日間の戦いが始まりました。国際トップレフェリーとしての意識や立ち振る舞い、生活の仕方などを叩き込まれていきます。24 時間 365 日国際トップレフェリーであれ。ミーティングがない日は REST DAY の２日間のみ。朝７：00 ～のトレーニングに始まり、朝のミーティング、ゲームを行い、夜 23：00 頃までのミーティング。試合のない日やリザーブの日は各ペアでトレーニングを行います。今思えば、選手として世界大会を戦ってきた 15 日間に比べ、レフェリーとして戦っている 15 日間の方が様々な点でハードだなあと呟いてしまいました。ただ、その中で得たことは計り知れません。今大会を終えてお伝えしておきたい事は３つです。

1．競技規則の第８条
2．パッシブプレイ
3．ファーストコンタクト

１つ目は競技規則の第８条に関して。８条の４と８条の８（２分間退場の判定)、８条の５と８条の９（失格の判定)、８条の６と８条の 10（with 報告書の判定）に関してルールに準じて明確に的確に判定しなければなりません。特に気をつけたいのは、ジャンプしているプレーヤーに対する接触、ウィングプレーヤーに対する防御。選手の安全を守る意味でも、安易に警告で終わらせてはいけません。世界大会に出る選手たちは、相手を退場させようとか、ファールを受けているように見せかけるようなことはしません。

２つ目はパッシブプレイに関して。

パッシブプレイに関しては、すでに通知済みでシグナル後のパス回数は MAX6 回＋シュート。６回パスのシュートがブロック等でコートアウトになった場合や、味方に戻ってきた場合は後１パス＋シュート。そのシュートブロックが続く限り、１パス＋シュートは永遠に続く。このルールを認識していなければ間違った場所で笛を鳴らすことになってしまいます。

また、シグナルをあげるタイミングに関しては、スピードハンドボールが主流になってきている今、自陣からのファストブレイク後に敵陣でボールを回すタイミングで交代、または、退場時の安易なボール回し、時間、得点に関わってシグナルがあげられます。例えるならば、日本の女子代表チームのように７人攻撃を行う際に、ディフェンスからファストブレイクを行ったのちに敵陣でボールを回しながら交代をするような場面ではレフェリーとしてはシグナルの準備をしていることを注意したいところです。



３つ目はファーストコンタクトに関して。ハンドボールはコンタクトが面白さの一つです。フィジカルやメンタルの他、オフェンスの戦術、ディフェンスの戦術、その選手のプレイや意図が見えてくる瞬間です。様々な場所でコンタクトがある中で、今回は６m―９m 内でのファーストコンタクトに関して例を挙げます。一番簡単な例は、エリア内防御であるか否かの判定。シューターに対してコンタクトがエリア内であれば７M の判定、エリアの外側であれば７M の判定ではないということになります。ただし、そう単純でもなく、その影響や選手のミスプレイかどうかも判断していかなければいけません。エリアから距離がある場面で例を挙げると、９M 付近での１対１

の場面。当然ディフェンス側はオフェンスを守ろうとし、その中で、最初にファールを行なっているのはどちらか。オフェンスのオーバーステップが先なのか、ディフェンスのホールディングが先なのか。ディフェンスが正当に守っている状況で、オフェンスの歩数が多くなった場合、その時にフリースローを吹かなければ、そのまま続けた場合、ディフェンス側にロングホールディングの反則を取らなければいけなくなります。（２分間退場）最初に反則をしたのはどちらか。オフェンスファールに関しても同様である。どちらが先に正しくその空間にいたかどうか。ファーストコンタクトを正しく見極めることは、判定をする上で非常に重要なポイントです。これを間違えると、一方が優位になる可能性が大きくなっていきます。

　その他にスピーディーで迫力ある魅力的でよりアグレッシブなハンドボールに見せるためにレフェリーは務めなければいけません。反則を取ることだけがレフェリーの仕事ではありません。そのためには、レフェリーとしてできる事、やらなければならない事を継続していく必要があります。簡単なことでは決してありませんが、特に私たちは国際トップレフェリーとしてやらなければいけない事、決してやってはいけない事の区別と実践、さらには選手・スタッフに対し敬意を払い任務を遂行しかなければなりません。その事を再確認する大会となりました。



最後になりましたが、今大会に関わる全ての方々に感謝の意を表し、今後も私達は、日本のハンドボールの発展のために勤めて参ります。日本のハンドボールの発展と活躍を心から祈願し、報告とさせていただきます。

女子世界ユース選手権　過去の大会結果

回数	開催年月日	開催地	参加国数	日本順位	優勝	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位	11位	12位	13位	14位	15位	16位	17位	18位	19位	20位	21位	22位	23位	24位
1	2006	カナダ	11	7位	デンマーク	韓国	ルーマニア	フランス	スロベニア	アルゼンチン	日本	タイ	ブラジル	カナダ	チュニジア													
2	2008	スロバキア	16	13位	ロシア	セルビア	デンマーク	フランス	スペイン	韓国	スロバキア	アンゴラ	オランダ	ブラジル	アルゼンチン	チュニジア	日本	プエルトリコ	香港	カタール								
3	2010	ドミニカ	19	15位	スウェーデン	ノルウェー	オランダ	フランス	スペイン	デンマーク	ロシア	ドミニカ	韓国	アンゴラ	ハンガリー	ウルグアイ	ブラジル	ドイツ	日本	カザフスタン	アルゼンチン	コンゴ	タイ					
4	2012	モンテネグロ	20	8位	デンマーク	ロシア	ノルウェー	ルーマニア	ハンガリー	スペイン	フランス	日本	韓国	オランダ	モンテネグロ	ブラジル	チェコ	クロアチア	アンゴラ	カザフスタン	ウルグアイ	コンゴ	ポルトガル	パラグアイ				
5	2014	マケドニア	24	14位	ルーマニア	ドイツ	デンマーク	モンテネグロ	韓国	オランダ	ブラジル	ロシア	スウェーデン	クロアチア	ポルトガル	アルゼンチン	ノルウェー	日本	ハンガリー	フランス	マケドニア	チュニジア	パラグアイ	アンゴラ	カザフスタン	中国	コンゴ	ウズベキスタン
6	2016	スロバキア	24	17位	ロシア	デンマーク	韓国	ノルウェー	ハンガリー	フランス	スウェーデン	クロアチア	エジプト	アンゴラ	ドイツ	ブラジル	スロバキア	ルーマニア	スペイン	スロベニア	日本	アルゼンチン	パラグアイ	チリ	カザフスタン	中国	コンゴ	ウズベキスタン
7	2018	ポーランド	24	14位	ロシア	ハンガリー	韓国	スウェーデン	ドイツ	デンマーク	オランダ	スペイン	ルーマニア	フランス	ノルウェー	クロアチア	ポーランド	日本	オーストリア	チュニジア	モンテネグロ	チリ	スロバキア	アルゼンチン	アンゴラ	中国	エジプト	カザフスタン



第43回日本ハンドボールリーグ開幕記者発表



第 43 回日本ハンドボールリーグ開幕記者発表が、9 月 18 日（火）15 時から都内で開催されました。日本ハンドボールリーグ機構吉田實会長の挨拶で始まった記者会見は実施要綱の説明の後、男女各９チームの監督からチームスローガンや抱負が語られた。

9 月 22 日に開幕、3 回戦総当たり男女各 108 試合をおこない、その後 2019 年 3 月 15 日～ 17 日に上位 4 チームによるプレイオフでの出場を目指して動き出した。

ファンの皆様には、是非会場に足を運び選手のパフォーマンスに声援をお願いします。



第47回全国中学校大会



最終順位

男子	優　勝	浦添市立神森中学校（沖縄県）
	準優勝	大阪体育大学浪商中学校（大阪府）
	3　位	千葉市立若松中学校（千葉県）
		岩国市立平田中学校（山口県）
女子	優　勝	宇土市立鶴城中学校（熊本県）
	準優勝	小松市立芦城中学校（石川県）
	3　位	岩国市立岩国中学校（山口県）
		沖縄市立美東中学校（沖縄県）

開催期間　2018年8月18日～8月21日
開 催 地　山口県・周南市
主　　催　公益財団法人日本中学校体育連盟
　　　　　公益財団法人日本ハンドボール協会
会　　場　キリンビバレッジ周南市総合スポーツセンター

優秀選手

男子	嵩西　颯斗	浦添市立神森中学校（沖縄県）
	安里　健伸	浦添市立神森中学校（沖縄県）
	伊禮　颯雅	浦添市立神森中学校（沖縄県）
	下川　陽向	大阪体育大学浪商中学校（大阪府）
	安達　圭吾	大阪体育大学浪商中学校（大阪府）
	二木　彪悟	千葉市立若松中学校（千葉県）
	竹下　晴日	岩国市立平田中学校（山口県）
女子	浅川　舞	宇土市立鶴城中学校（熊本県）
	坂守　華怜	宇土市立鶴城中学校（熊本県）
	松田　虹春	宇土市立鶴城中学校（熊本県）
	高来　葵美	小松市立芦城中学校（石川県）
	竹内　梢莉	小松市立芦城中学校（石川県）
	岩根こころ	岩国市立岩国中学校（山口県）
	金城菜々子	沖縄市立美東中学校（沖縄県）

大会を振り返り

第47回全国中学校ハンドボール大会周南市実行委員会事務局長
湯浅 昭宏











「重ねた努力　流した汗　光り輝け　中国の地で！」の大会スローガンのもと「平成 30 年度全国中学校体育大会第 47 回全国中学校ハンドボール大会」を８月 18 日～ 21 日の４日間にわたり、山口県周南市のキリンビバレッジ周南総合スポーツセンターにて開催しました。

本会場では、各ブロックの厳しい予選を勝ち抜いてきた代表チームが集まるなか、激戦が繰り広げられ、男子では、春の全国中学生ハンドボール選手権大会を圧倒的な強さで制した沖縄県浦添市立神森中学校が、女子では、熊本県勢としては２年ぶり、チームとしては 37 年ぶり５回目の優勝となる熊本県宇土市立鶴城中学校が、栄冠を手に入れる結果となりました。また、開催地である山口県勢が４校出場し、男子岩国市立平田中学校、女子岩国市立岩国中学校が３位。地元周南市の代表である男女岐陽中学校がベスト８という好成績を収め、地元開催に花を添えてくれました。

本県での全国中学校ハンドボール大会の開催は、第 30 回大会以来、17 年ぶり４度目の開催となりました。４度目の開催とはいえ前回までに精力的に競技や運営に取り組まれていた先生方のほとんどが、ご退職されたか、現在では校長・教頭の職についており、当時を経験している先生は私ひとりという中での準備スタートとなりました。３年前の開催県岩手県花巻市、２年前の開催県石川県石川市、先催県の沖縄県那覇市・豊見城市の運営を視察させて頂きましたが、大会会場の大きさや役員の多さに圧倒されっぱなしでした。しかしここで考えました。ないものをねだるよりあるもので最高の「おもてなし」をしよう。「おいでませ　山口」「おいでませ　周南」の精神でやり遂げようと視察団と話をしたことも懐かしい思い出です。

今回は、二つの柱で、大会運営を心がけました。まずは、中学生を中心とした大会運営です。岐陽中総合文化部による司会進行。岐陽中吹奏楽部による演奏。さらに国歌斉唱も中学生の合唱で行いました。中学生が中学生を「おもてなし」で迎える。そのコンセプトで考え出されたものでした。もう一つは、小学生連盟との連携です。小学生指導者を役員として活用したり、決勝戦では、小学生がエスコートキッズとして、選手を誘導しました。未来ある小学生が、全国大会での活躍を夢見てほしい。小学生の指導者が、「こんな選手を育てたい」という思いをもってほしい。そして小中連携。このつながりが、より山口県のハンドボールの礎になると信じて運営を行ってきました。

改めて、生徒役員として献身的に動いてくれた周南市・下松市内の中学生ハンドボール部員に感謝致します。また、こちらの期待以上にそれぞれの役割を責任を持って取り組んでくれた山口県中体連ハンドボール専門部の役員、山口県ハンドボール協会の役員、テクニカルデレゲートも快く引き受けて下さった先輩方・中国各県のハンドボール専門委員長の方々、全ての方々の思いが一致団結して大会運営に取り組むことができました。先生方の「おいでませ」の精神に深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、今大会を開催するにあたりご尽力いただきました（公財）日本中学校体育連盟、（公財）日本ハンドボール協会、山口県、周南市、山口県ハンドボール協会、中国中学校体育連盟、山口県中学校体育連盟、周南市中学校体育連盟、そして各協賛各位に改めて厚く御礼申し上げますとともに、次年度開催である兵庫県大会の成功を祈念して、今大会のお礼のあいさつとさせていただきます。

男子優勝 浦添市立神森中学校（沖縄県）

神森中学校ハンドボール部監督　**友利 彬彦**

はじめに、平成 30 年度全国中学校体育大会・第 47 回全国中学校ハンドボール大会において優勝することができ、大変うれしく思っております。また、春の全国大会に続き、２冠の達成となりました。これもひとえに、ご支援、ご協力いただいた学校関係者の方々、保護者の方々、沖縄県、そして浦添市の先生方のおかげであると深く感謝しております。また、大会開催にあたり、大会準備、運営にご尽力いただきました山口県ハンドボール協会の皆様、関係機関、関係各位の皆様方に心よりお礼申し上げます。

昨年度、地元で開催された夏の全国大会ではベスト４。悔しい思いをした選手達は高い目標を掲げて練習に取り組んできました。春の全国大会では優勝することができたが、課題が残る大会でありました。目指すは「春夏連覇！！」

この３年生 21 人の「団結力・チームワーク」は想像以上であり、仲良しでもあるが、良きライバルとして切磋琢磨し、メンバーに入るために貪欲に練習に励んでいた。夏に勝つために必要なことは、守備の強化とシュート率の向上。個々の課題とチームの課題を明確にし取り組みました。うまくかみ合わず、悩み苦しむ時期もありましたが、チーム同士で何度も話し合い、認め・励まし・互いに合い支えながら、どんな壁も乗り越えた３年生 21 人。それこそがチームの強さの原点であったと確信しています。

地区・県・九州大会と徐々にチームのモチベーションも高くなり、すべてにおいて良い状態で全国大会に臨めたと思います。

そして全国大会。「３年生 21 人。みんなで一緒に良い形で終わろう！」を合い言葉にチームは、試合を重ねるごとに強くなり、レギュラー・控えのメンバー・コート外で支えてくれたメンバー全員が活躍し、自分たちが目指すハンドボールを展開してくれました。

春の王者として「夏も王者になる」と、日本一を目指す一方、どの試合にも負けられないというプレッシャーがあるなか、本当に生徒達は良く頑張ってくれました。これも、何より伊禮コーチと選手との間にあった厚い信頼関係が土台になっていたことに他なりません。生徒を思い、時には厳しい声をかけながらも、最後まで生徒を信じ、コミュニケーションを大事にして、共に日本一を目指すコーチの姿に、私自身、多くの学びがありました。日本一のチームに関われたことを誇りに思います。

最後に、今大会に至るまで、沖縄県ハンドボール協



会の皆様、神森中学校の先生方をはじめ、多くの方々から多大なる支援をいただきました。また、保護者の皆様におかれましては、惜しみないサポート、温かいご声援をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

神森中学校男子ハンドボール部主将 **伊禮 颯雅**

僕たちは、春の全国大会を優勝してから、「夏も優勝して、春夏連覇する。」という目標を立てました。ですが、この春夏連覇までの道のりは、簡単ではありませんでした。時にはチーム内で意見が合わず、納得するまで話し合う場面もたくさんありました。

また、先生方には「春と夏では全然違う。春のまま試合をすれば絶対に負ける」と、何度も口酸っぱく言われてきました。だが、このチーム３年生 21 名は、目標を変えることはなく、「絶対に夏も優勝する！」という気持ちはとても強かったです。

神森中学校として、戦うのが最後となった今大会では、一試合、一試合、悔いを残すことなく、全力で戦うことができました。決勝戦では、点差が離れず、大阪体育大学浪商中学校も神森中学校も一歩もゆずらない場面もありましたが、ディフェンスでしっかりと守った時は、自分達の持ち味、「守って速攻」で点を重ね、前半３点リードで後半をむかえました。後半でも、ディフェンスがしっかりと機能し、速攻が繋がりました。

また、速攻が繋がらない時には、セットプレーで、一本一本大切にシュートを打ち、とても良い流れで後半戦を戦うことができました。試合終了のブザーが鳴った瞬間、「本当にこのチームで良かった。今まで苦しい練習もみんなで乗り越えてきて良かった。」と感じました。

春夏連覇をすることができたのは、自分達の力以上に、支えてくれた方々がいて、春夏連覇をさせるために、指導してくださった友利先生、屋良先生、多和田先生のお陰です。本当にありがとうございました。

女子優勝 宇土市立鶴城中学校（熊本県）

宇土市立鶴城中学校女子ハンドボール部監督 **米村　敬**

「３・2・1…」観客席から聞こえる仲間の大声援。最後のゴールインのホイッスルと同時に試合終了を告げるブザーが鳴り響き、歓喜に包まれました。今までの辛く厳しかった練習、神経をすり減らし体力の限界まで走りきった試合から解放され、選手全員がはじける笑顔で、光る涙を流す姿に「おめでとう」「よくやった」と心が震えました。それと同時に、今までがむしゃらに走り続けてきた時が一瞬止まったような錯覚に陥ったのをはっきりと覚えています。

私たちは「仲間を信じて頂点へ」をチームの合い言葉にし、生徒・保護者・指導者一丸となって日本一を目指して活動に取り組んできました。しかし、春の全国大会では今回準決勝で対戦した山口県岩国中学校に１回戦で敗れ、全国のレベルの高さと自分たちの甘さを実感しました。その悔しさを忘れないため、その日の交流戦から数多くのチームと練習試合をさせていただき、「夏こそは」と決意を新たにしました。

チームコンセプトである「日本一の速攻」を体現すべく、平日練習では春以降さらに速攻練習に時間を割き、休日を利用して多くの強豪校に協力いただき、練習試合を積み重ね、速さと正確さを磨いてきました。そしてチーム最大の課題であった、精神面の弱さを克服するために部活動の時間だけではなく、24 時間トレーニングを言い続けてきました。「弱い自分」「らくをしたい自分」と向き合い、そのような自分に勝てなくても「逃げない」ことを目標にしてきました。この２つのトレーニングが功を奏し、全国大会では「日本一の速攻」「競った場面で逃げない」チームへと変容できたと思います。

このようにたくましく成長できた背景には、本校職員の愛情溢れる指導や温かい励まし、市当局からの多大な支援、地域住民からの応援があります。立ち止まりそうな選手をいつも後押ししてくれました。この優勝は、これまでの歴史の延長線上にあると思っています。多くの失敗を踏まえた経験からつかみ取ったものです。現役の生徒、保護者ばかりではなく、今まで出会ってきた方々みんなで喜びあえたらと切に思います。



最後になりますが、第 47 回全国中学校体育大会の開催にご尽力いただきました山口県ハンドボール専門部の皆様をはじめ、関係機関、関係各位に心から感謝申し上げます。私たちにとって一生忘れられないかけがえのない場所となりました。「日本一」の価値を決めるのは、これからの人生であることを選手とともに肝に銘じ、さらに努力を重ねていきたいと思います。ありがとうございました。

宇土市立鶴城中学校女子ハンドボール部主将　坂守 華怜

昨年の先輩方が全国３位という素晴らしい結果を残してくださり、「先輩達を超えよう」と全国の決勝の舞台に立つという目標を立て、始まった新チーム。三年生の先輩の人数が少なかった為、二年生だった私達も何人か試合に出させていただきました。たくさんのきつい練習を乗り越え頑張りましたが、九州大会で負けてしまい、全国大会に出場出来ず、先輩方に何も恩を返せないまま終わってしまいました。

悔しい気持ちを抱えたまま始まった私達のチームでは、「日本一」を目標に定めました。毎朝最低３km の走り込みで基礎体力を作り、「日本一の速攻」をつくるために速攻練習に力を入れてきました。そして、「去年の悔しい思いを晴らして、日本一を取ろう」という思いで戦った春の全国大会。たくさんの方々から期待され、応援を受け「絶対に負けられない」と思いました。しかし、初戦一点差で敗れ、去年と同じ失敗を繰り返してしまいました。本当に悔しかったし、全国で勝ち上がっていくのは簡単ではないということがよく分かりました。それからの練習は、今まで以上にきついことばかりでした。多くの強豪校と練習試合をさせていただき、たくさん怒られ、たくさん泣き、たくさん走りました。何度も何度も心が折れそうになったり、辛くて逃げ出したくなったりすることもありました。それでも逃げずに乗り越えてこられたのは、仲間と家族の支えがあったからです。

一つ一つ課題を克服し、日々の練習の中で自分達の成長を感じることで自信を持ち、「仲間を信じて頂点へ」と全国大会に望みました。初戦から強敵との連戦でしたが、「日本一」という目標をぶらさず、鶴城の持ち味である「守って速攻」という形で勝ち進み、優勝することができました。どの試合も僅差の試合でしたが、私達の一番自信のある走力戦に持って行くことができ、落ち着いて試合を進めることができました。

私達が日本一になることができたのは、３年生 15人の力だけでなく、毎日懸命にハンドボールを教えてくださった監督、コーチ。そして、私達のために多くのサポートや日本一の応援をしてくれた 1,2 年生と保護者の皆さん。学校の先生、地域の方々…数えきれないほどたくさんの方々に応援され、支えられたから日本一になれたと思います。多くの部員に恵まれ、幸せな環境でハンドボールができたことに感謝の気持ちを忘れず、日本一になれたことを誇りにこれからも頑張っていきたいと思います。

最後になりましたが、大会の運営でお世話になった多くの皆さん、本当にありがとうございました。心から感謝いたします。

戦　評

■男子準決勝

神森(沖縄)　25(14−6、11−12)18　若松(千葉)

優勝候補の一角、攻撃力に定評がある沖縄県神森中と接戦を制して勝ち上がってきた千葉県若松中との決勝進出をかけた一戦。先制点は神森中・照屋拓の速攻による得点。その後も、神森中はパスカットを狙う積極なディフェンスや緩急を取り混ぜた攻撃から伊禮の威力のあるロングシュート、滞空時間の長い嵩原のサイドシュートなどで得点を重ねる。対する若松中も二木のミドルシュートや森のポストシュートで得点を狙う。しかし、地力に勝る神森中は、攻撃の手を緩めることなく攻め続け、8連続得点の猛攻で6対14と神森中のリードで前半を終了する。

後半開始早々、神森中は4−2ディフェンスに変化させ、若松中の攻撃の芽を摘みにかかる。神森中は7対17と10点差とリードしたところで、選手を大幅に交代させ、登録選手全員を出場させる余裕の采配。意地を見せたい若松中は、伊藤のカットイン、二木のミドルシュートで追い上げをはかるが、神森中も村山のブラインドからのステップシュートなどで得点。若松中は最後まであきらめず得点を狙い後半12点を奪うが、前半の得点差が大きく詰め寄ることはできず、18対25で神森中が決勝進出を決めた。

大体大浪商(大阪)　26(14−10、7−11、2−1、3−3)25　平田(山口)

初戦から危なげない試合運びで準決勝まで駒を進めた大阪府・大体大浪商中と地元の大きな期待を背負い、初の決勝進出に挑む山口県・平田中の一戦。開始早々、大体大浪商中が下川、竹下のシュートで3連続得点する。対する平田中も大﨑の速攻、竹下、山田のカットインなどで得点していく。12分、平田中は竹下のカットインで1点差に追いつくが、大体大浪商中も下川を中心に土岐のポストなどで確実に得点する。平田中も有田のサイドや山田、竹下のロングなどで応戦するが、大体大浪商中のGK大砂による好セーブも光り、前半を14対10で折り返す。

後半開始早々、平田中GK藤村による執念のセービングで得点を許さない。勢いづいた平田中は山田、有田が得点する。その後も平田中GK藤村が好セーブで、チームを勢いづける。しかし、大体大浪商中の尾上がサイドから確実に決める。平田中は藤重のロングが決まり、一進一退の攻防が続く。17分に平田中は大体大浪商中の下川、安達にマンツーにつく。22分、平田中山田の執念のシュートで1点差まで追いつき、大体大浪商中の退場を誘った。24分、平田中大﨑のポストが決まり、同点に追いつく。24分30秒に藤村の好セーブがあり、勝ち越すチャンスだったが、大体大浪商中のディフェンスに阻まれ、勝負は延長戦へもつれ込んだ。

延長前半1分大体大浪商中の土岐のポストで点を取るが平田中もすぐに大﨑のポストで点を返す。23対22の大体大浪商中1点リードで折り返す。延長後半早々平田中の山田のロングが決まり、同点に追いつく。その後、大体大浪商中竹下がループシュートを決め、25対23まで突き放す。平田中も竹下の気迫あるロングが決まり1点差。延長後半4分坂井がカットインを決め、試合を決める。その後平田中竹下のロングが決まるがここでタイムアップ。26対25で大体大浪商中が熱戦を制し、決勝進出を決めた。準決勝に相応しい大接戦となった。

■男子決勝

神森(沖縄)　33(13−10、20−14)24　大体大浪商(大阪)

春夏連覇を狙う神森中と、初優勝を狙う大体大浪商中の一戦。先手をとったのは神森中。GK嵩西の好セーブから安里がロングを豪快に叩き込む。すかさず大体大浪商中も、坂井、尾上の連続得点でリードを奪う。神森中の伊禮が2連続得点をすれば、大体大浪商中は安達、下川のロングで取り返す両者全く譲らない展開。その後、神森中は照屋慶、安里、伊禮の3連取、照屋慶の2連取などで9対5と抜け出す。しかし、17分神森中伊禮の退場を機に、大体大浪商中は照屋拓にマンツーマンをつけ、坂井のカットイン、安達の速攻で8対10と点差を詰める。その後は点を取り合い、前半は13対10で折り返す。

後半は神森中伊禮の得点で幕を開ける。ここから激しい点の取り合いとなる。神森中は7人攻撃を交えながら伊禮、根間、村山の3連続得点で引き離す。大体大浪商中は伊禮にマンツーマンをつけるが、この試合絶好調の安里などの得点で神森中の勢いは止まらない。大体大浪商中も下川、坂井を中心に必死に攻めるが神森中GK嵩西が好セーブを連発。大体大浪商中もオールコートマンツーマンから、井上、下川が意地の得点を決め、最後までくらいつく。圧倒的な攻撃力を見せつけ、神森中が5年ぶり、全国最多6回目の優勝を手にした。

戦　評

■女子準決勝

鶴城（熊本）　13（5−7、8−4）11　岩国（山口）

　両校とも過去に優勝経歴のあるチーム同士の対決。両校とも活気あふれる大応援団の声援を背に、鶴城中松田の得点で幕を開ける。岩国中も藤岡凜、牧野、岩根の３連取でリードを奪うが、鶴城中も松永、岡崎の速攻で３対３の同点に追いつく互角の立ち上がり。その後は一進一退の攻防が続く。17 分、岩根の連続得点から岩国中が抜け出すかと思われたが、鶴城中も GK 浅川の安定したセービングから、松田の速攻も決まり必死にくらいつく。前半は７対５の岩国中２点リードで折り返す。

　後半に先手をとったのは岩国中。岩根がミドルを鮮やかに決め、続けて藤岡凜も速攻を決める。流れは岩国中と思われたが鶴城中も坂守のミドルを皮切りに、怒濤の５連続得点で９対 10 と逆転。さらに鶴城中は巧みなブロックから坂守がカットインを決め、２点をリードする。その後は両 GK の好セーブもあり、得点が入らない時間が続くが、22 分鶴城中は松田がサイドシュートをねじ込み 10 対 13 とする。終了間際、岩国中も藤岡凜がサイドシュートを決め意地を見せるがここで試合終了。鶴城中が終始安定したディフェンスで決勝に駒を進めた。準決勝に相応しい引き締まった試合であった。地元の期待に応え続け、最後まで戦い抜いた岩国中にも拍手を送りたい。

芦城（石川）　18（8−6、10−10）16　美東（沖縄）

　石川県・芦城中と、沖縄県・美東中の準決勝。序盤、紺谷のロング、高来の速攻で流れを掴んだのは、芦城中。美東中も金城のカットインで応戦するが、芦城中紺谷のポスト、奥村の速攻と勢いが止まらず、９分 46 秒にたまらずタイムアウト。その後、美東中名嘉の連続得点、GK 比嘉の好セーブ、さらに芦城中の高来、紺谷へのダブルマンツーで、６対４と徐々に勢いを取り戻す。７分間の膠着状態を破ったのは、美東中玉城の速攻。そのまま勢いに乗るかと思われたが、芦城中高来のロング、辻のサイドで流れを渡さない。前半終了間際に、美東中金城のパスカットからの速攻が決まり、８対６で前半を折り返した。

　後半美東中は高いディフェンスへとシステムチェンジし、西田（ゆ）や西田（こ）の得点で、後半３分ついに１点差とする。芦城中は 10 分 26 秒に退場者を出すが、粘りのあるディフェンスで１失点に抑える。さらにダブルマンツーで広くなったスペースを竹内や奥村がうまく攻め、芦城中の勢いが止まらない。美東中は西田（こ）のサイドや GK 比嘉の好セーブが光ったが、なかなか縮まらない点差に次第に焦りが見え始める。美東中は粘り強く守り、最後まで諦めずに全員で戦ったが、18 対 16 で、芦城中が決勝進出を決めた。

■女子決勝

鶴城（熊本）　26（13−11、13−10）21　芦城（石川）

　平成最後の中学女子チームの頂点を決める一戦。決勝に駒を進めたのは、粘り強いディフェンスから攻撃が持ち味の鶴城中と左右両フローター中心の攻撃をみせる芦城中。先制点は芦城中・エース紺谷のロングシュート。すぐさま鶴城中も松永や山下のカットインで応戦。その後、芦城中は高来、紺谷のロングシュートやポストの回り込みからのカットイン、鶴城中は３人のクロスからカットインや巧みなパスフェイクからの攻撃で一進一退の攻防を見せる。鶴城中の両サイド、松永・松田のシュート力が光り、13 対 11 と鶴城中の２点リードで前半を折り返す。

　後半序盤、芦城中は手渡しパスから竹内による得点。鶴城中は堅いディフェンスから岡崎や山下の速攻で得点を重ねる。一時４点差まで広がり、鶴城中に流れが傾きかけたが、芦城中・高来が意地のロングシュートを決め、流れを引き戻す。中盤に入り、鶴城中はやや攻めあぐねるシーンも見られたが、守護神・浅川のナイスセーブや角度のない位置からのサイドシュートも決まり、鶴城中が攻勢を強める。両チームとも最後まで勝利を目指して必死の戦いを見せたが、26 対 21 で鶴城中が日本一の栄冠に輝いた。


asics
I MOVE ME™
GEL-FASTBALL
FAST
MORE
フィッティングを追及した軽量スピードモデル
GEL-FASTBALL 3
THH546 / 本体価格 ¥11,800+税
NEW COLOR
5001 インシグニアブルー × ホワイト
001 BLACK/SHOCKING ORANGE
7月中旬発売予定
アシックスシューズのストライプデザインはアシックスの商標であり、世界の多くの国で登録された商標です。
本体価格は消費税抜きのメーカー希望小売価格です。 ■商品についてのお問い合わせ先：アシックスジャパン株式会社お客様相談室 0120-068-806
■当社ホームページ asics.com からもお問い合わせをしていただけます。
TOKYO 2020
TOKYO 2020 PARALYMPIC GAMES
Tokyo 2020 Gold Partner
(Sporting Goods)

第9回全国中学生クラブチームカップ











開催期間　2018 年 8 月 13 日〜 8 月 15 日
開 催 地　大阪府・堺市
主　　催　公益財団法人　日本ハンドボール協会
会　　場　堺市金岡公園体育館、堺市立大浜体育館

最終順位

【男子】
優　勝：広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブ（広島県）
準優勝：ヴァルト岐阜（岐阜県）
３　位：霧島クラブ（鹿児島県）
４　位：大阪 RSC（大阪府）

【女子】
優　勝：霧島クラブ（鹿児島県）
準優勝：とびうめジュニア（福岡県）
３　位：大阪ジュニアクラブ（大阪府）
４　位：貝塚バーディーズ（大阪府）

個人表彰

【男子】
《MVP》
大崎　優太（広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブ）
《大会ベストセブン》
花田　諒斗（広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブ）
楠原　颯馬（広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブ）
品川　隼汰（広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブ）
栗田　哲太（ヴァルト岐阜）
石川　颯悟（ヴァルト岐阜）
外種子田　崚汰（霧島クラブ）
山中　隆聖（大阪RSC）
《インパル賞》
地蔵堂　一樹（広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブ）
《Doron賞》
西村　実弘（米子ジュニアハンドボールクラブ）

【女子】
《MVP》
篠原　優和（霧島クラブ）
《大会ベストセブン》
坂本　晶（霧島クラブ）
川島　空来（霧島クラブ）
藤谷　こころ（霧島クラブ）
外口　若奈（とびうめジュニア）
小宮　彩蒼（とびうめジュニア）
小林　実杜（大阪ジュニアクラブ）
岸田　夏希（貝塚バーディーズ）
《インパル賞》
野口　彩花（HC千葉Jr）
《Doron賞》
円山　仁希（高知JHC）
松下　祐陽（豊里HC）
岸田　菜那（米子ジュニアハンドボールクラブ）

第９回全国中学生クラブチームカップを振り返って

大会副総務委員長　酒巻 博美

７月上旬の西日本を中心とした豪雨災害や土砂災害に見舞われた方々には、お見舞い申し上げますとともに、今後の早急な復興を心よりお祈り申し上げます。広島・岡山や愛媛県のクラブチームの皆さんのお元気な姿に大阪で再会できた時は、本当に安堵致しました。

昨年より日本協会主催になった全国中学生クラブチームカップですが、年々参加チームが増加し、今年第9回大会は、男子21・女子15チーム（うち２チームは合同）計36チームの参加となりました。

今大会では、これまでとは大きく違う２つのことがありました。

１つ目は、かつてない猛暑の中での開催ということでした。

既に閉会した全国小学生大会での周到な安全対策を参考にさせていただきながら、審判会議では給水タイムの儲け方等を検討し、TDとの連携も確認を致しました。

代表者会議でも、内・外気温の１時間ごとの確認とアップ会場での安全確保の周知徹底を、また開会式の際には、選手のみならず会場全体で互いの健康管理に努めようとアナウンスをいたしました。

実際には、２つの会場の空調が万全で、開催中熱中症や暑さによる体調不良を訴える等大きな事故もなく、心配が杞憂に終わったのは有難いことでした。

２つ目は、女子の試合に１号球を使用したことでした。

中学生専門委員会では、以前より女子中学生の競技力向上のために１号球を使ってはどうかという意見がありました。しかし、具体的に使用して検証するデータが存在しないため今年初めからクラブチームの指導者に１号球使用の提案に関するアンケートや意見の集約を図ってまいりました。その結果、ほぼ全クラブの賛同により、今大会で女子中学生が１号球を使って試合を行うという運びとなったのです。

準備にしっかり時間を費やしたクラブ、今大会直前で１号球を使って練習したクラブと過程は様々でしたが、現段階での指導者へのアンケート結果では、圧倒的にパフォーマンスは上がったとの回答を得ています。

今後はビデオ分析、選手への詳しいアンケート結果の分析を経て検証へと進む予定です。

画期的な試みでしたが、これもクラブチーム指導者の方々の前向きな協力体制があって実現できたことと、改めて深く御礼申し上げます。

さて、春中に遡りますと、鹿児島県の霧島クラブが男子準優勝・女子３位という大変すばらしい結果をもたらしたのは記憶に新しいところです。このチームに男女どう立ち向かうか、大会が始まる前から興味深い話題となっていました。

女子は過去８大会中７回の優勝を誇る大阪ジュニアクラブが準決勝で福岡県のとびうめクラブに敗れるというセンセーショナルな展開となり、決勝戦は春中３位の霧島クラブがとびうめの挑戦を受けて立つ形となりました。お互い170cm前後のエースに大型ゲームメーカーが絡む両者が果敢に前を狙う姿は、とても力強くスケールの大きい、また将来性を十二分に感じさせるものでした。18対15で霧島クラブが初優勝に輝きました。

また【普及型】（小学６年生も参加）では、茨城県の豊里HCが優勝しました。

男子準決勝に進んだ４強は昨年と同じ顔ぶれで、広島メイプルレッズジュニア　対　霧島クラブ、ヴァルト岐阜対大阪RSCの対戦となりました。春中２位の霧島クラブが準決勝で広島メイプルに２点差で敗れ涙をのみましたが、いかに今年のクラブチームのレベルが全体的に上がってきたかを表していたとも思います。

決勝戦は２連覇を狙う広島メイプルレッズジュニアがヴァルト岐阜を24対21で下し、見事栄冠を手にしました。両GKの好セーブの連発、息を呑む速い展開の応酬と、決勝戦にふさわしい見応えのある、またとても楽しいゲームでした。

今年も大阪・堺市ハンドボール協会様、審判団、普及育成部の皆さま、大阪ジュニアクラブやヴァルト岐阜他の保護者の皆さまのご指導ご尽力のもと無事大会を終えることが出来ましたことを、改めまして心より御礼申し上げます。

来年度は第10回大会となり、クラブチームカップにとって大きな節目となります。

記念大会を経て一層の発展に繋がるよう皆さまの暖かいご支援をよろしくお願い致します。

男子優勝 広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブ（広島県）

広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブ 中学生男子監督　河原 隆雅

まず初めに、この大会を運営してくださった実行委員会の皆さま、運営に携われた、大阪ジュニアクラブ・ヴァルト岐阜・岐阜７Beat のスタッフ及び保護者の皆様、この大会のためにご尽力いただいたすべての方々に心からお礼申し上げます。

クラブチーム所属の中学生が夏の大会として、一番の目標としているこの大会が、昨年度から日本協会公式大会となり、おかげさまを持ちまして、当クラブは２連覇を成し遂げることができました。ありがとうございました。

今年のチームは昨年度に続けと２連覇もめざしてはいましたが、まずは１戦１勝、一つ一つの試合に勝つことを目標に練習を重ねてまいりました。しかし、その道のりは決して平坦なものではありませんでした。限られた練習時間の中で、うまくいかず、壁にぶつかったときもありました。コートの中でいかに自分自身の役目を果たせるか、それぞれの能力を発揮することができるか、いかにハンドボールを理解できるかを課題にしてきました。

今年は昨年度よりも参加チームが増え、１回戦からトーナメントになったため、負けたら終わりの勝負となりました。そうして迎えた第１戦、山梨市 HC との対戦は、緊張もあったのか、なかなか自分たちのプレーを出すことができずに前半を終え、後半からはディフェンスも良くなり勝ち進むことができました。そこから決勝まで、どの試合もミスはあったし、だめなプレーもありましたが、ディフェンスを立て直し、自分たちのプレーができたことが、彼らを優勝へと導いてくれたのではないかと思います。

１戦１戦を大事に戦い、キャプテンの楠原君はチームをまとめ一番に声を出し、苦しい時間帯にファインセーブしてくれた GK の花田君、どんな時も一番よく走った玖須君をはじめ全員がよく頑張ってくれました。

最後に、選手たちをサポートしてくださった保護者の方々、時間の許す限り卒業まで練習に付き合ってくれた先輩選手、練習会場を提供してくださった各施設の方々、すべての方々に感謝しています。ありがとうございました。

広島メイプルジュニアスポーツクラブ 主将　楠原 颯馬

第９回全国クラブチームカップという素晴らしい大会で優勝ができ、また２連覇達成を成し遂げることができました。

３月に行われた春の全国大会では、ベスト８でおわり自分達のメンタルの弱さに気付かされ悔し涙を流したことは今でも忘れられません。その悔しさをバネに先輩達が成し遂げてくれたクラブチームカップ優勝、２連覇を目標としてチーム一丸となって頑張ってきました。

今大会で一番苦しかった試合は、準決勝での霧島クラブとの決勝進出をかけた試合でした。霧島クラブは春の全国大会準優勝チームで強敵だと思いました。自分達メイプルジュニアは強い気持ちで試合にのぞみました。前半立ち上がりから自分達のペースで試合運びはできたものの、しかし後半点差がちぢまり正直不安な気持ちもありましたが、この試合勝ち取れたことでチームの力はより強くなったと思います。このチームとして最後の大会を最高の形で終えることができて本当に嬉しかったです！

今思えば、小学生から中学生になり入部した当時は何もできず先輩の背中を追うだけ、自分はとても下手くそでチームメイトに迷惑ばかりかけていたことをはっきり覚えています。しかしそんな自分を、河原監督をはじめ先輩、沢山の人にハンドボールを教わり、監督自ら実際にプレーを見せてくれて分からない自分にとことん教えてくださったおかげで自分に自信がつくようになり、週２回の練習が楽しみでしかたありませんでした。

今後も教わったことを活かし次の目標に向けてレベルアップをしていきます。

最後にこのチームで優勝できたのは、河原監督及び倉岡コーチ、渡辺先生、高原さん、どんな時でも自分達のことをみまもってくれた保護者の方々、今まで応援して下さった沢山の方々のおかげです。感謝の気持ちでいっぱいです。

今後も感謝の気持ちを忘れずに努力していきます。本当にありがとうございました。

女子優勝 霧島クラブ（鹿児島）

霧島クラブ監督　篠原 すみえ

この度、第９回全国中学生クラブカップにおいて、霧島クラブ女子が初優勝することができました。

霧島クラブは2010年霧島ジュニアハンドボールクラブを設立し卒業後、中学校にハンドボール部がない子供達の為に2015年に霧島クラブを設立しました。先ずは人として成長する事が技術の成長へと繋がると信じ、礼儀や練習の送迎をして下さる方々への感謝の気持ちやチームワークの大切さを伝えてきました。

2016年少ない人数ではありましたが県大会出場、クラブカップへ初出場し準優勝。

2017年も２年生チームでしたが２年連続準優勝する事が出来、自分達で考えて判断しハンドボールを楽しんでやれる様になってきました。

１月の県新人戦で優勝し第13回春の中学生ハンドボール選手権大会へ初出場を果たしました。結果は男子が準優勝、女子が３位とコツコツと頑張ってきた成果が出た大会でした。

４月から新入生が加わりクラブカップに向け限られた時間の中で選手同士が練習の間に確認する姿も見られるようになり、決して妥協せずお互いに向き合う事で最後まであきらめないプレーが根付いてきました。

こうして迎えた８月のクラブカップ３年生にとっては最後の大会、今回は１号球の使用となりどのチームも攻撃のスピードやシュートの威力が増していると感じました。準決勝、決勝ともに高い攻撃的なディフェンスに対しパスがうまく繋がらない事や、ゴールキーパーとの本来の連携がうまく取れない場面もあり自分達のリズムに乗れない時間帯がありました。

そんな中でも今まで課題とされてきた全員で攻め１人１人が判断してプレーする事を意識付け、どんな場面になろうともゴールキーパーを中心にしっかり守って走ろうと話をし、最後、しっかり点を取り優勝する事が出来ました。今までいろんな経験をさせていただき、チーム一丸となり関係者の方々と一緒に頑張ってこれた事に喜びを感じています。

最後になりますがこの大会の運営に携われました関係者の皆様方に心からお礼申し上げます。

また、県ハンドボール協会をはじめ、練習等に協力していただいた各高校の指導者の方々、クラブチームの指導者の方々、各中学校の指導者の方々、社会人ハンドボール部、そして、いつも選手の送迎をしていただいている保護者や地域の皆様のご協力があってこそその結果だと心から感謝しています。本当にありがとうございました。

戦　評

■男子準決勝

ヴァルト岐阜　28（16－3、12－9）12　大阪RSC

ヴァルトのスローオフでスタート。30秒後ポスト堀、続けて栗田のロングシュートと得点してヴァルトが勢いづく。大阪RSCの3-2-1ディフェンスの広いところをつき、カットイン、サイドシュートと得点を重ねる。15分10対3となったところで大阪RSCがタイムアウト。しかしその後もヴァルトGK岩山の再三の好セーブと6-0の堅いディフェンスに阻まれ、得点をあげられないまま前半終了。

後半、メンバーもディフェンスシステムも色々変えるヴァルトのミスをついて、大阪RSCもサイド、カットインと得点するが、GK池田も好セーブを連発、28対12でヴァルト岐阜が決勝進出を決めた。

広島メイプルレッズジュニア　23（前後半スコア不明）21　霧島クラブ

広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブのスローオフで始まった。開始1分、広島メイプル右サイドの地蔵堂がサイドからきり、ポストシュートで先制。その後も品川のカットインシュート、玖須のカットからの速攻、楠原のミドルシュートなどで得点を上げ試合の主導権を握る。4対0になったところで、霧島クラブは6分19秒にたまらずタイムアウトを要求する。霧島クラブは、攻守の立て直しを図るがパスミス・シュートミスが続きリズムがつかめず、11分過ぎ霧島クラブ石丸のポストシュートで初得点を上げる。両チームともに硬さもとれ、一進一退の攻防を展開し、前半広島メイプルが6点リードをして折り返した。

後半開始早々、霧島クラブセンター有馬と左45水口のクロスに見せかけ、手渡しパスで有馬のカットインシュート、また広島メイプルのミスを見逃さず外種子田（崚）、石丸の速攻で3連続得点を上げ、1分45秒で6点差あった点が、3点差まで追い詰めた。しかし、広島メイプルの大崎のミドル・カットインシュート、地蔵堂のサイドシュートですぐに点を取り返す。両チームとも、着実に得点し、離されない試合展開となる。広島メイプルは退場者を出し、霧島クラブ久木﨑の好セーブから有馬の速攻で、4点差まで追い詰める。広島メイプルは18分59秒にタイムアウトを要求。タイムアウト後、中本がシュートを決め、5点差にし、点差は縮まらず。しかし、22分過ぎ、広島メイプルに退場者が出る。霧島クラブの速攻で、点差が縮まってきたが、広島メイプル花田の好セーブもあり、緊迫した試合展開であった。広島メイプルが23対21で霧島クラブを下し、決勝進出を決めた。両チームGKの好セーブ素早い速攻チームの特徴を出した好ゲームであった。

■男子決勝

広島メイプルレッズジュニア　24（10－8、14－13）21　ヴァルト岐阜

組織的に攻撃を組み立てて、バランスよく攻撃を展開して得点を重ねていくメイプルJrに対して、個人技に優れた後藤、栗田で得点を重ねていくヴァルト岐阜とともに持ち味を活かした展開で10対8でメイプルJrが2点リードで折り返した。

後半立ち上がり ヴァルト岐阜のつつみの連続得点ですぐに追いつき、10分まではどちらが勝つかわからない展開となった。しかし、メイプルJrの組織的はディフェンスが機能し始めると、無理なシュートが目立つようになり、確実にノーマークシュートを決めるメイプルJrが次第に得点をつける展開となった。栗田を中心に最後まで諦めずに戦ったヴァルト岐阜であったが、組織力で戦ったメイプルJrが24対21で勝利を収めた。

■女子準決勝

霧島クラブ　28（17－8、11－8）16　貝塚バーディーズ

前半立ち上がり、霧島が佐藤のサイドシュートで先制、貝塚も石井のカットインシュートで得点するも、霧島の堅いディフェンスに阻まれ、試合の主導権を霧島に奪われる。その後も霧島はロング、カットイン、サイドシュートなど多彩な攻撃で加点、貝塚も必死で反撃をこころみるが及ばず、前半を霧島17対8貝塚で終了。

後半、貝塚も再々いいシュートを打つが、霧島キーパー坂本の好守に阻まれ、なかなか加点することができない。そのまま霧島ペースで試合は展開し、最終的に霧島28対16貝塚で霧島が勝利した。

とびうめジュニア　25（12－10、13－12）22　大阪ジュニア

大阪Jr.のスローオフで試合開始。開始直後、大阪Jr.は素早いパス回しから田村のカットインで7mTを獲得し、小林が7mTを決め先制した。とびうめJr.は山下のサイドシュートですぐさま点を取り返す。大阪Jr.は5-1DFから速攻で得点を重ね、とびうめJr.は外口のミドル、カットインなどバリエーションの多い個人技で得点を重ねた。両者譲らない一進一退の攻防が続いたが前半終了間際、とびうめJr.は、大阪Jr.の変則ＤＦの裏をかいた攻めを展開し、小宮、外口の得点で10対12、とびうめJr.の2点リードで前半を終えた。

後半もとびうめJr.が優勢で試合を進める。大阪Jr.も得意の速攻で反撃する。終盤、大阪Jr.疋田の連取で20対21と1点差まで追い上げる。大阪Jr.は、とびうめJr.外口に厚く当たるが小宮のカットインが冴え渡り、あと一歩が及ばない。24分過ぎには大阪Jr.がオールマンツーを仕掛けるが、とびうめJr.外口、梅田のゴールで22対25とし、とびうめJr.が大会6連覇中の女王を下し、初の決勝進出を果たした。

■女子決勝

霧島クラブ　18（6－5、12－10）15　とびうめジュニア

どちらも初優勝を狙う九州勢の決勝戦は、とびうめのスローオフでスタート。お互い動きが固く、4分近くにようやくとびうめ外口がフリースローを決め1点。その後はパスシュートミスも出て15分過ぎまで3対3で進む。霧島篠原のロングやポスト冨士谷のサイドシュートで得点するも、すぐに外口が取り返す。とびうめは小宮カットインで取った2本の7mTを霧島のGK坂本に阻まれた。前半はディフェンスも動きが少ないまま6対5の霧島1点リードで折り返す。

後半霧島の6-0ディフェンスのポストの動きが良くなり、徐々にとくてんを重ねるもとびうめも小宮の3連続カットイン等で食らいつく。どちらのチームも大型バックプレイヤーを軸に対角が前を狙うスタイルや、常に選手同士が話し合い、自分たちで局面を切り開こうとする姿などが似ていて中学生が見習いたい点が多かった。後半半ばに開いた点差を一進一退のまま埋められず最後は霧島クラブが初の栄冠に輝いた。

第20回 全日本ビーチハンドボール選手権大会



開催期間　2018年8月25日～8月26日
開 催 地　愛知県・碧南市
会　　場　碧南緑地ビーチコート











試合結果

女子リーグ

	日本体育大学	札幌静修高等学校	KUNOICHI	東海Ｗｅｅｄｓ！	ハミングバード
日本体育大学		○ 2(20-2,17-5)0	○ 2(12-8,7-6)0	○ 2(27-6,12-6)0	○ 2(17-7,20-9)0
札幌静修高等学校	× 0(2-20,5-17)2		× 0(3-18,5-24)2	× 0(1-10,5-13)2	× 1(9-6,5-9,2-5)2
KUNOICHI	× 0(8-12,6-7)2	○ 2(18-3,24-5)0		○ 2(17-5,19-6)0	○ 2(13-6,20-6)0
東海Ｗｅｅｄｓ！	× 0(6-27,6-12)2	○ 2(10-1,13-5)0	× 0(5-17,6-19)2		○ 2(4-5,12-7,3-0)1
ハミングバード	× 0(7-17,9-20)2	○ 2(6-9,9-5,5-2)1	× 0(6-13,6-20)2	× 1(5-4,7-12,0-3)2	

男子リーグ

	ＢＢＪ	天王寺６７	札幌静修高等学校	東海Ｗｅｅｄｓ！	ＭＪクラブ
ＢＢＪ		○ 2(14-8,20-5)0	○ 2(24-8,19-12)0	○ 2(16-10,23-18)0	○ 2(18-16,19-10)0
天王寺６７	× 0(8-14,5-20)2		× 1(8-14,12-1,1-4)2	× 1(11-10,11-22,2-10)2	× 0(4-18,2-23)2
札幌静修高等学校	× 0(8-24,12-19)2	○ 2(14-8,1-12,4-1)1		× 0(5-20,12-16)2	× 0(10-16,9-24)2
東海Ｗｅｅｄｓ！	× 0(10-16,18-23)2	○ 2(10-11,22-11,10-2)1	○ 2(20-5,16-12)0		○ 2(20-18,21-16)0
ＭＪクラブ	× 0(16-18,10-19)2	○ 2(18-4,23-2)0	○ 2(16-10,24-9)0	× 0(18-20,16-21)2	

大会を振り返り ………………………………………………… 沖本 哲郎

今年７月にオープンしました碧南緑地ビーチコートにて、８月25日、26日の二日間、男子５チーム、女子５チームを集めて総当たりのリーグ戦で大会を実施しました。

直前まで、台風の影響で開催が心配されておりましたが、一転して台風一過となり35度を超える高温の中での大会となりました。高温による熱中症、熱射病の恐れがあったため、当日は水分、塩分補給に細心の注意を払うことで、病人、怪我人を出すことなく大会を終えることができたのは、運営スタッフのおかげだと思っております。

碧南緑地ビーチコートは鉄分、塩分などの不純物を除去したオーストラリア産の砂を使用していて、砂自体は熱くならないため、ソックス無しでも火傷の心配なくプレーできました。また、コート脇は芝生で整備され、テントを張り巡らしているので、試合の待ち時間も快適に過ごせる環境の整ったコートとなっており、参加者からはまた碧南緑地ビーチコートでビーチハンドボールをやりたいとの声をいただきました。

今年は、北海道から札幌静修高等学校が男女揃って、初めてビーチハンドボールに参戦しました。前日入りして、ナイターでも練習したおかげでみるみる上達していき、男子は待望の１勝をあげることができ、今後の活躍にも期待を持てました。

また、大阪の大学生チーム天王寺67も２年連続で参戦し、今年はユニフォームを新調し、ビーチハンドボールに対する意気込みを感じました。徐々にではありますが、全国各地にビーチハンドボールの裾野が広がっていることを実感しております。

男子の試合は、初参戦の札幌静修高等学校も果敢に２点シュートを狙いビーチハンドボールならではのプレーが随所に見られました。上位を争うチームはどの試合も接戦となり、実力的には同じくらいでしたが、ミスが少なかったチームが勝利する形になりました。

女子の試合は、日本体育大学とKUNOICHIが頭一つ抜け出していました。しかしながら、日本体育大学－KUNOICHIのカードはお互い意識してか動きが硬く、枠外へのシュートが目立ち、ロースコアの試合となりましたが、チャンスをものにした日本体育大学が逃げ切り全勝となりました。

試合の結果および成績に関しましては前ページを参照ください。

今までは審判が不正入場のチェックも行っておりましたが、年々試合展開が早くなり、審判だけでは見きれなくなってきたため、今大会から審判の負担を減らし、ゲームに集中できるようにするため国際基準に準拠してTDを配置しました。今後も選手への普及だけでなく、審判、TDへも普及活動を行い、競技人口の増加とともに、審判、TDを増やしていきたい。

運営に関しましては、ビーチハンドボール委員を中心にご協力していただけ、円滑にスケジュールを消化できたことに感謝しております。

最後になりましたが、碧南市様、碧南市スポーツ課様には、大変すばらしい施設を貸していただき、また、１年前から打ち合わせに付き合っていただき大変感謝しております。まだまだビーチハンドボールの認知度が低いですが、今後は他のビーチスポーツと協力して、碧南市がビーチスポーツの拠点となるように普及活動に努めてまいります。株式会社モルテン様には、試合球を提供していただきありがとうございました。名鉄観光サービス様には締め切りギリギリまで宿泊人数の変更に対応していただいたことに感謝いたします。また、今大会でも地元の企業様のご厚意で協賛していただいたことにうれしく思います。

多くのハンドボール関係者、報道関係者にお越しいただき、まことにありがとうございました。東海テレビ様におきましては、何度も打ち合わせしていただき、より一般の方にも伝わる形での報道を試行錯誤していただけたことに感謝いたします。

大会運営に協力していただきました、KUNOICHI、札幌静修高等学校の皆様には心より感謝申し上げます。

女子優勝

日本体育大学

日本体育大学 コーチ　**高橋 佑奈**

　初めに、第 20 回全日本ビーチハンドボール選手権大会開催にあたり、運営をしていただいた日本ハンドボール協会、ビーチハンドボール委員会、愛知県ハンドボール協会、運営補助員の皆様方、心より感謝申し上げます。
　本年は愛知県碧南市に新設されたばかりの碧南緑地コートでの開催となりました。オーストラリアの砂を使用し炎天下の中でも砂の温度が上がる事なく選手も非常に素晴らしい環境で試合に臨むことができました。
　今回、私達日本体育大学は、ビーチハンドボールでのプレー経験が浅い選手が多く、千葉県富浦海岸で開催されました第２２回ハンドフェスタ富浦さざ波大会で積んだ実戦経験、反省を元に今大会に臨みました。
　経験豊富な KUNOICHI さんとの試合では選手全員がピルエットシュートで得点できるので DF は非常に苦労しました。自チームにピルエットシュートに安定感がある選手が少なくオフェンスキーパーで２得点を狙いますが、思うように得点できず苦しい展開になる時間帯が多くありました。試合の展開状況を読み取り確実に１得点を重ねる事も非常に重要だと感じました。その中でもスカイプレーでの得点、キーパーの好セーブもあり苦しくも勝利し更に優勝できたことは選手も自信になったと思います。しかし、先程にも述べさせていただいた通り、ピルエットシュートやスカイプレーなどの２得点シュートを積極的に狙える選手が少ないのが現状です。更なる競技力向上の為、国際試合において戦い抜く為にも個々のスキルアップを図っていきたいと思っております。
　又、今回の参加チームで札幌清修高校が参加していましたが、初経験ではありますが普段と違うハンドボールに対し楽しそうに積極的にプレーしていたのが印象的でした。こうして全国から沢山のビーチハンドボーラーが誕生するのは大変喜ばしい事ですし更なる発展、普及する事を願うばかりです。
　最後になりましたが、今大会開催の為にご尽力いただきました関係者の皆様、厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

男子優勝

BBJ

　８月 25 日、26 日に愛知県碧南市の碧南緑地ビーチコートで開催された全日本ビーチハンドボール選手権大会は２日間とも天候に恵まれ、ビーチハンド日和となりました。大会運営に携わっていただいた関係者の皆様、お忙しい中計画、準備、運営等ありがとうございました。
　BBJ は結成２年目のチームです。メンバーは過去に日本代表としてアジアビーチゲームズに出場経験のある小松大地、松永健、高良優樹、高野克也。湧永製薬を３月に引退したばかりの小川航世。大分のクラブチームで活躍している佐藤友哉。ビーチの大会に出場経験のある小林優介と日本体育大学卒業生が中心となったチームで、ビーチとインドアの経験を最大限に活かし、昨年度に引き続き優勝する事ができました。
　今大会では、事前に合宿を行ったことでオフェンスとディフェンスの動きを確認する事ができ、全試合で２セット連取のストレート勝ちをする事ができました。その中でも MJ クラブとの試合では苦しい場面で選手全員が声を出し、戦術を確認しあったりチームの士気を高めたりした事で勝利に繋げることができました。また夜にはチームでミーティングを行い、互いに意見を出し合った事で、プレーの質を向上させる事ができました。
　今後、BBJ のメンバーはアジアビーチゲームズに出場し決勝進出、そしてワールドゲームズへの出場を目標に活動していきます。それと同時にビーチハンドボールという競技を１人でも多くの方に知っていただきハンドボール界全体を盛り上げていきたいと思います。

最終順位



【女子優勝】日本体育大学（東京）



【女子準優勝】KUNOICHI（千葉）



【女子３位】東海Weeds!（愛知）

【女子４位】ハミングバード（愛知）
【女子５位】札幌静修高等学校（北海道）



【男子優勝】BBJ（東京）



【男子準優勝】東海Weeds!（愛知）



【男子３位】MJクラブ（愛知）

【男子４位】札幌静修高等学校（北海道）
【男子５位】天王寺67（大阪）

【女子】 上位に入った、日本体育大学、KUNOICHI はほとんどが２点シュートだったため、下位チームとは大きく点を開いて終始余裕のある試合運びとなった。

日本体育大学―KUNOICHI 戦では、お互いパスミス、シュートミスが目立ちロースコアの試合となってしまった。今後は試合中に修正できるようなメンタル面の強化を期待したい。

優勝した日本体育大学はビーチハンドの経験こそ浅いものの、バランスよくどこからでも点が取れ、谷川を中心にディフェンスが機能し、勝負所を見極め、キーパーの竹谷との連携がしっかりできていた。

【男子】 戦術が向上し、２点シュートを中心とした攻撃がほとんどになってきた。スピンシュート、スカイシュートでどこからでも２点が狙えるように個人の技術は近年目まぐるしく向上しているため、ディフェンスが薄くなったところをスペシャリストシュートで確実に２点を狙えるようになってきた。

また、シュート技術の向上に伴って、シュートブロックが工夫され、簡単には得点が取れない場面も増えてきた。

優勝した BBJ は、両ウィングがスピンシュートを決め、中央からスペシャリストの佐藤が長身を生かしてのロングシュート、同じくスペシャリストの小林はスピードを生かしてカットインと非常にバランスの取れた攻撃により、ディフェンスの的を絞らせないことができたのが勝ちに繋がっていた。

ディフェンス、オフェンス、キーパー全てが技術的な向上が見られた大会であった。

【全体】 大会直前まで、台風がどうなるか心配でしたが、一変して大会当日は、35 度を超える気温となりました。熱中症の心配もありましたが、事故、怪我がなく大会を終えられたことを本当に良かったと思います。

昨年から参戦していただいた大阪の大学生チーム天王寺 67 は、惜しくも１勝をあげられませんでしたが、昨年よりも２点シュートの精度が上がってきていました。

北海道から参戦した札幌静修高等学校は、男女ともにビーチハンドボールの大会初出場でしたが、前日入りし、ビーチに慣れ、みるみるうちに上達していきました。男子はショットアウトまでもつれましたが、待望の１勝をあげられ、何より楽しんで競技できたことをうれしく思います。

NTA2018 欧州遠征 in Denmark/Aarhus

2018.8.25-9.10

2018 年度 NTA ジュニアアカデミー欧州遠征
男子の部：参加者



NTA委員長　尾石智洋　(公財)日本ハンドボール協会/東久留米市立西中学校
NTAコーチ　ネメシュ ローランド　(公財)日本ハンドボール協会/法政大学
NTAコーチ(運営)　田中叡人　(公財)日本ハンドボール協会/ミズノスポーツサービス(株)
NTAコーチ(総務)　松永康宏　(公財)日本ハンドボール協会/川崎市立高津高校
トレーナー　岩谷美奈子　(公財)日本ハンドボール協会/永井接骨院

【NTA 活動方針】

ハンドボール選手としての個人技能・能力のレベルアップを図り、世界に通ずる選手としてのスキル教育を行うとともに、将来に渡り日本を代表し社会で活躍できる人材としての育成を行う。更には人間形成の支援と競技力向上の両立を図る。特に的確な判断ができる選手の育成に努め、正しい動きを早期に習得させる場とする。また強さを身につけるために、体力トレーニングも重点項目として体格形成を行う。

～欧州遠征に向けて～

NTA 活動方針に基づき本事業は、選手の個人技能・能力のレベルアップであり、勝敗のみに着目しないトレーニングを行う。身体の基本的な動きづくり、フィジカルトレーニング、コーディショニングトレーニングなどプロコーチによる専門的指導を行う。また、同世代の選手との合同練習及び練習試合を行い、トップレベルのハンドボールを体感し今後の課題を明確にさせる。さらに、プロ選手との交流、デンマークの生活文化に触れることでより選手としての知見を広める。

スタッフは練習内容の本質を学ぶことや、現地のプロコーチからのセミナーを受講し、コーチとしての資質を高める。

【成果と課題】

NTA 委員長　尾石 智洋

今年度より、NTA の活動は年間 6 回の合宿と日韓交流と今回の欧州遠征で活動計画をしました。その目的は中・高校生に「早期」に世界基準の欧州のプレーと韓国のプレーを経験し世界基準をスタンダードにすることです。

実際にデンマークの様々な U16 のクラブと試合や練習をさせていただき、選手たちは自分たちに足りないものは何なのか、本気に考えられる機会となりました。また、これまでの練習で培ってきたものが通用し、自信を持って継続して練習に励むきっかけとなったと思います。

最も明確な課題は、男女とも体格差もありますが、コーディネーションや身体作りが劣っていました。ハンドボールの練習ばかりにとらわれず、正しい身体つくりに目を向け、日本での練習環境の見直しやメニューの改善をしていくべきだと思いました。

また、指導のレベル向上を目標にタレント育成の運営方法を学んできました。今後、日本の状況を正しく把握し、定期的で効率のいいトレーニングを行えるような環境を世界基準で出来るよう改善に努めていきたいと思います。今後とも、NTA の活動への応援、支援賜りますようよろしくお願いします。

男子代表　(LW) 下川 陽向

僕はこの欧州遠征にて一番学んだことはサイド DF の守り方、駆け引きです。なぜならば、チームで一番小さく出来ないことがたくさんあります。しかも、世界のハンドボールを全く知りませんでした。

今回、デンマークの 5 チームと試合をしました。他のチームとも練習

2018 年度 NTA ジュニアアカデミー欧州遠征
女子の部：参加者



NTA委員長　尾石智洋　(公財)日本ハンドボール協会/東久留米市立西中学校
NTAコーチ　古橋幹夫　(公財)日本ハンドボール協会/日本ハンドボール協会
NTAコーチ(運営)　小田中叡人　(公財)日本ハンドボール協会/ミズノスポーツサービス株式会社
NTAコーチ(総務)　麻生薫　(公財)日本ハンドボール協会/倉敷市立東中学校
NTAコーチ(通訳)　北野香代　(公財)日本ハンドボール協会/横浜市立六角橋中学校
トレーナー　岩谷美奈子　(公財)日本ハンドボール協会/永井接骨院

が出来ました。シュートの確率は悪くなかったです。今後の課題は、サイドとして切るタイミングや飛び込む角度、ジャンプする位置、手の角度一つ一つを考えてシュートを打ちたいです。

しかし、DF はパワープレーは一人で絶対に守れませんでした。海外では簡単に守れない事を体感しました。だから、守る位置などを駆け引きしなければいけません。チームで守らなくてはいけません。また、身長がない分、頭の上を通されるパスもカットできませんでした。なので、パスを入れさせるタイミングやシュートに飛び込ませないような駆け引きが出来るよう練習したいと思いました。またそのための通用する強い身体にしたいです。

デンマークの生活では現地の食事もしっかりと取れコンディション作りもうまくいきました。それも、環境を整えてくださった沢山の方々のおかげだと思いました。今後もチームとしての用意と、個人としての準備を意識して生活していきたいと思います。この欧州遠征で学んだ事を意識して常にハンドボールの事を考えて行動できるようにしていきたいです。

女子代表　(PV) 伊藤 結衣

欧州遠征を通して、様々な経験を積むことができました。日本の食事とは違い、パンを主食としていて、体重をキープするのが大変でした。体調管理をこれから今まで以上に意識していくきっかけとなりました。

デンマークの練習は日本とは違い、短い時間にいろんなことを詰めていて練習時間が非常に短かったです。試合前のアップも 15 分間で行う時もあり、デンマークの選手は自分達で事前に各自で動いているのが印象的でした。相手の方が身長が高く体格も良く、一対一では押し負ける場面がかなりありました。ですがフォローし合えば守れると感じました。私たちでも戦えると自信もつきました。

最初の試合は「敵わない」と思ってしまい、本来の力を出しきれませんでしたが、前向きな気持ちで挑んだら、本来の力を発揮でき、勝つことができました。試合後はビデオを見て話し合い、DF ではもっと積極的に前に出てフリースローを取りに行って良いと思いました。下がりすぎてフォローが行きにくくなっていたり、最終場面で身体の接触で負け、7mT になってしまったり、もっと身体を張って守らなければならないと思いました。

OF に関してはシュートまではいけても、前に飛んで角度が取れず決めきれなかったので、韓国では必ず決め切れるように練習します。自分は PV として空間に移動した時に、もっとパスをもらえると思いました。そして中継に浮いてからの展開が得点に繋がる場面が多かったので、自分が中継に上がることも増やしていきたいと思います。声かけに関しては意識していたのですが、ディフェンスの始めは出ていたとしても、本当に大事な場面になると出ていなかったりしていたので、どんな場面でも声が出せる選手になりたいと思いました。

そして、自分達がこうして欧州遠征していた裏側で沢山の人が動いてくださっていたことに感謝しています。また、NTA を背負っていることを忘れずに努力していきたいです。本当にありがとうございました。

第26回
全日本マスターズ大会
交流型

開催期間　2018年8月3日〜8月5日
開 催 地　山口県・周南市
会　　場　キリンビバレッジ周南市総合スポーツセンター

周南コンベンション協会事務局長　**山田 みゆき**

平成30年夏、山口県周南市の中心部は、幸いにも大会直前に発生した西日本豪雨による直接の影響は多くなかったものの、その後は連日の記録的な猛暑の中、8月3日（金）の周南市陸上競技場での11人制大会を皮切りに、4日(土)・5日（日）の2日間キリンビバレッジ周南総合スポーツセンター（4面）、徳山高校（1面）、岐陽中学校（1面、8/4のみ)の3会場で、地方開催にもかかわらず男子38チーム・425名、女子12チーム・131名、合計50チーム・556名の選手の参加をいただだき、手探りの連続ではありましたが何とか無事に開催することができました。本部関係者の皆様をはじめ各チームの選手・関係者の皆様から、最後まで貴重なご意見・ご指導と惜しみないご協力をいただいたこと、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

参加チームのエントリーがしばらくの間はほとんどなく締切日を過ぎてもまだまだ寂しい状況でしたが、大会が近づくにつれて徐々に参加チームが増え胸を撫で下ろす日々が続きました。また、参加人数や宿泊・弁当その他の注文数も変更を繰り返し、最後まで数字が確定せず集計に戸惑いましたが、後でひとりでも多くの方が参加したいとの強い想いから最後までスケジュール調整を続けて努力頂いていたことを知り感激しました。

連日の猛暑、各会場とも熱中症が一番懸念され、特に徳山高校と岐陽中学校は冷房設備がないため、据置型の大型扇風機数台とミスト付き扇風機、そして氷入りのクーラーバッグと冷たいお茶を大型ジャグで十分に準備しました。しかし、何より各選手・関係者の皆様ひとり一人の健康管理の徹底が行き届いていたことにより、熱中症だけでなく大きな事故や怪我もなく大会を終えることができたことは素晴らしいことだと思います。

試合は、3会場を移動しながら対戦する必要がありましたが、皆様のご協力のおかげで各コートとも大変スムーズに進行し、懐かしい顔ぶれ、フレッシュな組合せ、それぞれ試合を通して旧知を温め合ったり新たな友情が芽生えたりと、交流戦ならではの永遠のライバル同士の熱のこもった戦いと同時に常に相手を思いやるほのぼのとした一面を垣間見ることができました。順調な試合運びができた背景には、各チームにオフィシャル・審判の任務を確実にこなしていただいたことと、皆様全員のご協力の賜物であることを忘れるわけにはいきません。

最後になりましたが、コート設営をはじめ準備・運営まで多大なご協力をいただきました徳山商工高校の田原先生他地元関係者の皆様、徳山商工・徳山高校・岐陽中学校ハンドボール部の皆さん、選手の適切なケアに貢献いただいた山口県柔道整復師会の皆さんのご協力により、無事大会を終了することができました。本当に、ありがとうございました。

懇親会について

8月4日（土）19時より、キリンビバレッジ周南総合スポーツセンター多目的ホールに、約300名が出席しての懇親会が盛大に開催されました。

スタッフ一同、周南市に来て良かったと思っていただける懇親会にしたいとの思いで準備をし、当日を迎えました。

午前中の試合終了後に、床養生、椅子やテーブルの搬入、飲食の準備を行い、皆様をお迎えしました。地元の人気飲食店や、酒蔵に多大なるご協力をいただき、山口・周南の地元食材をふんだんに使用した料理と地元周南3蔵の地酒および恒例の霧島酒造様から協賛いただいた焼酎に舌鼓を打ちながら、楽しく語り合い懇親を深めました。

余興のマミーズ（沖縄）チームによるダンスとじゃんけん大会も大いに盛り上がり活況を呈し、予定の2時間があっという間に過ぎ去り、参加者各々名残惜しみながら手を取り合って、次回北海道での再会を固く誓い合って散会となりました。

マスターズハンドボール　交流型ならではのエピソード

交流型競技委員会

その1：岐阜県から参加しましたスマイル岐阜は4名でチーム構成ができない人数でしたが、女子の多くのチームが協力するという条件で参加を認めました。普通では考えられないことですし、「何とか勝つこともできました」という報告も受けました。

その2：2日目の男子の最終試合は摂津倶楽部と葵クラブの対戦でした。コート上をみるとCPはどちらも5名で戦っていました。試合終了後に摂津倶楽部のメンバーに「ベンチに選手がいるのにどうして5対5で試合をしたの？」と尋ねると、「相手チームの一人が怪我をして5人になったので、こちらも5人で戦いました」との返事でした。これも交流型ならではの優しさに私も久しぶりに感動いたしました。

第26回 全日本マスターズ大会

開催期間　2018年8月24日～8月26日
開 催 地　愛知県・豊田市
会　　場　スカイホール豊田

順位決定型

最終順位

		男子		女子
優　勝		GHBP Ares	優　勝	MLN 沖縄
準優勝		IMPAL with T	準優勝	NEW フェイス
3　位		大阪 330HC	3　位	MMCM

順位決定型（男子の部）

マスターズ委員会競技委員長　安藤　孝

今年は、20 チームが参加し白熱した試合を展開し迫力のある内容だったと思いました。平均年齢が交流型に比べかなり若く、選手のほとんどが 40 歳代であり、交流型の試合とは違ったスピードとパワーでその躍動感あるプレーに魅了されました。

審判についても各チームでしっかり行われていたと思います。反則に対しても、警告、退場を躊躇することなく笛が吹かれよく審判されていたと思います。

心配された怪我についてですが、手首の骨折がありましたが、アキレス腱を切るといった大きな怪我はなく、比較的ケガの少ない大会でありました。

初出場のチーム関係者に今大会の感想を聞いてみると、第一声「疲れましたー。」といった回答でした。普段は、35 歳以上のカテゴリーでの試合参加をされているそうで、チームとして比較的メンバーが集まれたそうですが、今大会は、40 歳以上の大会なのであまりメンバーが集まらなく、控えメンバーが少ないチーム構成であり順位決定型のスピードとパワーの試合で疲れたとのことです。

全試合を振り返ると、やはり勝ち上がっていったチームは、それなりの準備をしているからこそ、それなりの結果が生まれたと思います。

来年は、順位決定型、交流型、11 人制の大会が北海道で開催されます、来年参加される選手の皆さんは、1 年をかけて今以上に身体に磨きをかけ、万全の態勢で臨み、素晴らしいパフォーマンスと怪我のない大会にしていただくことを望みます。

順位決定型（女子の部）

交流型競技委員長　小山 哲央

8 月 24 日の開会式から始まりました順位決定型女子の部は、昨年度の大会で同率・同得失点で優勝を分けた MLN 沖縄と NEW フェイスの決勝となり、12 対 9 で見事に接戦を制した MLN 沖縄の優勝で 8 月 26 日に幕を閉じました。

今大会の女子の部では、ラフプレイや、レフェリーの判定に対してのベンチからの言動に、対戦相手やレフェリーだけでなく、観ている人たちまでも残念な思いをするという場面が見られました。マスターズハンドボールには「すべては参加者の手作りで」という基本理念があります。そのため、参加者各人が寛容の精神を持ち、大会全てを楽しむという大会趣旨を今一度踏まえて、マスターズハンドボール大会に臨み、ハンドボールを楽しんでいただきたいと思いました。また､負傷者が出てしまうという試合もある中、優勝された MLN 沖縄のチームは、東江功子監督が懇親会でおっしゃっていたように、しっかり練習をして本大会に臨んでいることがよくわかる息のあったプレイや、パフォーマンスの連続でありました。自分たちのチームも鍛え直して、来年の大会に臨もうという気持ちになった選手やチームがたくさんあったことでしょう。MLN 沖縄のみなさん優勝おめでとうございます。

最後になりましたが、オフィシャルやモップ係、スカイホール豊田のコート準備から片付けをしていただきました岡崎城西高校女子ハンドボールの皆さんと監督の木全常雄先生、そして運営をしていただいた HC 名古屋の皆さん、愛知県柔道整復師会の皆さんのおかげをもちまして無事大会を終えることが出来ました。ありがとうございました。

豊田大会 懇親会

坂野 賢治

当初、懇親会に参加されるチームも少なく開催も危ぶまれる状況でしたが、関係各位の御尽力により、100 名を超える参加者となり無事に開催を迎えることができました。懇親会ではいくつになってもハンドボールを心底楽しみたいという面々…そんな彼、彼女たちが、お酒をくみかわしながらハンドボール談義に花を咲かせるのもマスターズ大会ならではの醍醐味でしょうか。料理に関して、質は良いが量が足りないとご意見を多数頂いています。またチーム紹介で、参加を迷っていたが今回参加して良かったとのお言葉を頂きスタッフとして喜びを感じました。



今後、懇親会参加チームが増え、マスターズハンドボール、生涯スポーツとしてのハンドボールの未来について意見を交わせる場所としていただければと思います。最後に、御尽力頂きました関係者の皆様には、改めまして感謝申し上げます。

男子優勝　GHBP Ares

GHBP ARES キャプテン　高野　悟

GHBP ARES の全日本マスターズへの挑戦は今回で５回目でした。初出場、２年目と優勝する事ができました。３連覇を目指して頑張りましたが３年目、４年目と惨敗…。

今年は過去最少人数でのエントリー GK2 人、CP7 人…。毎試合、チーム・個人の役割分担をみんなで話し合い取り組みました。CP は交代選手が１人しかいない中、少数精鋭　お互いが話し合い、修正をかけながら勝ち上がり、決勝は前半 3-4 と１点ビハインド。後半 DF を我慢しながら１点、１点と積み重ね 8-2、11-6 とコートの選手の頑張り、応援、サポートメンバー、来れなかったメンバーの気持ちが奪還に繋がり４年振り３回目の「優勝」と平成最期のチャンピオンへと返り咲きが出来ました！　みんなに感謝！

来年も全日本マスターズで楽しく最高の想い出を作れる様に頑張っていきます。

大会企画、関係者の皆様に感謝しております。ありがとうございました。





女子優勝　MLN 沖縄

MLN 沖縄　東江 功子

～素敵な仲間達へ感謝～

私達 MLN 沖縄チームは、2014 年の全日本マスターズ沖縄大会にチームを結成し初参加して以来５年連続の出場となりました。そして、２年連続３回目の優勝を果たすことができました。結成当初は、それぞれ自分の所属チームがあったり、マスターズの時にだけ集まるという即席チームでしたが、昨年、ニューフェイスさんとダブル優勝を果たしたのを機に地元でも一般の大会や女子リーグに MLN 沖縄として参戦して活動するようになりました。しかし、大会などの試合以外練習には中々メンバーが揃わないので、他の一般チームの練習時にそれぞれが時間を見つけて参加したり、夏休みに入って練習試合を組みながら今回のマスターズ大会を迎えました。初戦から県外や離島から参加した久しぶりのメンバーともしっかりコンビを合わせる事ができ、準決勝、決勝と（たぶん年齢層の幅が一番広い我がチーム）全員がそれぞれの役割を果たし、楽しく試合を重ねることができました。マスターズ大会の順位決定型に参戦するチームは皆、優勝目指しながら本気モードで楽しむスタイルがとてもすばらしいと毎回感じています。気持ちはいつまでも若く熱くても、上手くコントロールできないボールを追いかけ、もつれる足、届かないパス…現実を見ながら必死に戦い、たまに見せる往年の技、テクニックなどでコートには笑いと感動が溢れとても楽しいです。この大会を通してお互いの頑張りを称えあいながら、親しくなった方も多くいます。出会いに感謝。そしてこうしたつながりとハンドボールの魅力をいつまでも感じさせてくれるマスターズ大会に感謝。いつも運営してくださる大会役員の皆様をはじめ関係各位、全国のハンドボールの仲間達に感謝いたします。来年も続けて参加できることを目標に私たち MLN 沖縄チームは地元でもハンドボールを楽しみます！そして全国の仲間達、来年も、一緒にハンドボールを楽しみましょう！！ありがとうございました。





第26回日・韓・中ジュニア交流競技会





第 26 回日韓中ジュニア交流競技会参加者名簿

		氏名	学校名
総監督		北中弘規	金沢中央高等学校
男子監督		平井徳尚	大分雄城台高等学校
男子コーチ		疋田雅己	天白高等学校
選手	1	川島豪	法政大学第二高等学校
	2	中谷仁義	金沢市立工業高等学校
	3	山田和直	富岡高等学校
	4	榎本悠雅	藤代紫水高等学校
	5	佐藤陽太	駿台甲府高等学校
	6	石嶺秀	興南高等学校
	7	石田知輝	洛北高等学校
	8	田中響人	近江兄弟社高等学校
	9	吉田守一	那賀高等学校
	10	山口直輝	高知中央高等学校
	11	白石竜聖	市川高等学校
	12	髙木アレキサンダー	市川高等学校
	13	久保寺 歩夢	駿台甲府高等学校
	14	蔦谷大雅	大体大浪商高等学校
女子監督		本田眞吾	上鶴間高等学校
女子コーチ		中山学	倉敷青陵高等学校
選手	1	田村瑠莉	佼成学園女子高等学校
	2	和知史華	埼玉栄高等学校
	3	瀧川璃紗	佼成学園女子高等学校
	4	植松花乃	佼成学園女子高等学校
	5	守屋葵	高津高等学校
	6	高山彩音	大分高等学校
	7	橋戸萌々香	飛騨高山高等学校
	8	岡みつき	高水高等学校
	9	中園愛子	明光学園高等学校
	10	白石理子	明光学園高等学校
	11	口田安美菜	神戸星城高等学校
	12	下馬場 燎	洛北高等学校
	13	立石恋菜	夙川学院高等学校
	14	瀧石涼伽	洛北高等学校

総監督　北中 弘規（全国高体連専門部委員長）

本競技会は、1993 年日本の福島県で第 1 回大会が開催され、日本、韓国、中国の三カ国が持ち回りで実施しているもので、今回で 26 回目となりました。今年度は韓国･全羅南道･麗水市において 8 月 23 日（木）から 29 日（水）まで開催されました。日本選手団は 11 競技に 256 名、ハンドボール競技は全国から選抜した選手 28 名、全国高体連専門部から役員 5 名が参加しました。

8 月 22 日（水）千葉県成田市「ホテルマイステイズプレミア成田」に集合しました。17 時から指導者ミーティングが行われ、日本選手団としての心得、全体日程、支給物品受取並びに明日からの行動、注意事項等についての連絡がありました。台風 19・20 号の接近で渡航が心配される中、23 日（木）13:55 発【エアプサン BX111 便】にて 16：15 金海国際空港に到着しました。3 時間のバス移動から 20：00 宿舎【ザ・オーシャンリゾート】に到着しました。

24 日（金）割当練習は中国が到着できず変更となり、10:30 ～ 12:00 大会会場となった全南大学麗水キャンパス体育館（エアコンの効くスポーツコート）で実施する事ができました。

16:00 からの監督・審判会議では、翌日からの試合方法・ユニフォーム等の確認を行いました。

ホテル内の食事会場で使われていたコンベンション会場において、17:00 から総合開会式が開催されました。麗水市文化雑楽団による「歓迎の舞」は異国文化を感じられる舞踏で

素晴らしく感激致しました。オープニングセレモニー後、麗水市長、大韓体育会会長らの歓迎の挨拶があり、旗手を先頭に各国が入場を行い、日本選手団会長 泉　正文氏および各国団長の挨拶があり閉会しました。19：00 からの夕食後ミーティングを行い明日からの試合に備えました。

8 月 25 日（金）からの試合は、全南大学麗水キャンパス体育館を会場に日本・韓国・中国・全南の総当たりで行われました。なお、試合結果詳細については、監督・コーチ・選手から別途報告があるので省略します。

日本選抜チームはその名の通り、全国から選りすぐった個性豊かな人材の集合体です。選手一人一人は高いプライドを有している一方、リーダーシップ、コミュニケーションなどに不安を抱きながら、練習や試合に臨みながらの共同生活を営む事になります。そうした意味からも、短期速成チームでコンビネーションの精度を上げ、限られた短い時間の中で戦術や個人の役割等を確認させ、同じ目標に向かって戦うチームとしての大切さを指導して頂いた、男子監督平井徳尚、疋田雅己コーチ、女子本田眞吾監督・中山学コーチに敬意を表すとともに、選手の皆さんに深く感謝しています。

また、選手たちの順応力の高さと男子主将：藤代紫水高校、榎本悠雅君、副主将：蔦谷大雅君、女子主将：佼成学園女子高校、瀧川璃紗さん、副主将：洛北高校、瀧石涼伽さんにはキャプテンシーを感じました。今回も、韓国の技術の高さ、体幹の強さ、そして何よりも勝利への執念は怖さを感じ、中国の大型化にも対応していかなければなりません。そして、今後も日本は世界に向け、高さとスピード、アウェーの笛にも屈しない精神的な強さと順応性も必要だと改めて感じさせられました。

26 日（日）競技会 2 戦目を終えホテルで夕食後、コンベンションホールにおきまして『フレンドシップ交流会』が開催されました。韓国ブレイクダンスチームによる開幕パフォーマンスの後、3 ヶ国選手団代表による歌・ダンスパフォーマンスなどが披露され交流会を盛り上げました。日本からは女子サッカーチーム、バレーボールチームが歌とダンスを披露して会場を盛り上げてくれました。

27 日（月）中国との最終試合を終え、男女共に 2 位となり、競技会は終了しました。

28 日（火）午前文化探訪（ロッテマート）、午後は、ホテル内でのウオーターパーク体験でした。

チームとして最後の夜、男女別にミーティングを行いました。他国選手との違い、自分の課題をつかんだ事などそれぞれが話し、大学での再会・対戦を誓い最後の夜を楽しみました。

29 日（水）9：00 ホテルを出発し、金海国際空港（釜山）14：35 発、成田空港 16：30 着で帰国しました。成田空港で解団式を行い、それぞれが帰路に就きました。

大会の参加に際しては、4 月大阪での選考会に協力頂いた大阪高体連の先生方、並びに、選手を派遣頂いた各校の監督。事前合宿を行わせて頂いた NTC の河上千秋さん。佼成学園女子をはじめ、足を運んで頂き胸をお借りした日体大男子チーム・日体大女子チーム、そして埼玉栄女子チーム、多大なるご支援とご協力を賜りました関係機関の皆様に心から感謝を申し上げます。

今後とも、全国高体連活動へのご理解とご支援をお願いしまして大会参加報告と致します。

男子監督　平井 徳尚（大分雄城台高校）

第 26 回日中韓ジュニア交流競技大会の選手選考会を本年度 4 月 14 日（土）～ 15 日（日）大阪府堺市家原大池体育館で実施しました。全国各ブロックより推薦を受けた男子 55 名が参加し、大阪府高体連専門部の先生方のご協力の下、体力測定・面接・基本練習・紅白ゲームを通して各ポジションでの技能、取り組みの姿勢等を考慮し、選考委員の北中弘規（金沢中央）飯田一郎（近江兄弟社）疋田雅己（天白）小川和人（明星）平井徳尚（大分雄城台）の 5 名で代表選手 14 名を選考しました。毎年ご協力いただいております大阪府高体連の皆様方にこの場を借りてお礼を申し上げます。

大会までの準備として、8 月 20 日（月）～ 22 日（水）の三日間、味の素トレーニングセンターにて強化練習を実施しました。22 日（火）には、日本体育大学の学生の胸を借りて、各ポジションの確認やゲーム感を養うことを意識して練習試合をしました。松井監督にはわざわざ足を運んで頂き、秋リーグ直前にも係らず快く対応して頂き感謝申し上げます。この練習ゲームで、選手たちも弾みをつけることができました。あとは、韓国独特のアウェーの笛が予想されていたので、その部分を意識して大会に臨みました。

■ 8 月 25 日（土）
日本　24（6 － 20、18 － 15）35　韓国
【得点】蔦谷 8、佐藤 5、榎本 4、石田 3、久保寺 2、吉田 1、山田 1

初戦の相手は地元韓国。アウェーの笛を想定して DF を 6：0 ディフェンス主体にして、ジャッジの展開によってシステムを変えることを確認して臨んだ。初戦ということもあり、少し浮き足立った雰囲気もあったが 3 点先取した。そこからジャッジが変わり選手たちも焦りと迷いが生じ始め、ミスから逆速攻での失点が続き、早打ちして逆速攻となり前半を終了した。

後半に入り、DF でのやるべきことを徹底した。吉田（那賀）・久保寺（駿台甲府）を中心としたディフェンスで粘り強く守って速攻へとつないで得点を重ね、蔦谷（大体大浪商）ロングシュートや佐藤（駿台甲府）石田（洛北）のカットインなどで詰めていったが、前半の差が大きくのしかかり、悔しい思いだけが残る敗戦となった。

■ 8 月 26 日（日）
日本 31（12 － 9、19 － 14）24 全羅南道
【得点】榎本 8、蔦谷 7・吉田 4、石田 3、山口・久保寺 2、中谷・山田・佐藤・石嶺・白石 1

地元選抜の全羅南道戦。前日のアウェーのジャッジ対策と、DF6 － 0 で起こりうるポストはがしや 1 対 2 の局面の駆け

引きを修正してゲームに臨んだ。蔦谷の豪快なロングシュートが決まり幸先良いスタートを切る。しかし、中盤、全羅南道も高さを生かしたDFでミスを誘い逆速攻や1対1からのカットインシュートなどで対応され得点を積み重ねてくる。しかし榎本（藤代紫水）のサイドシュートや速攻で得点を伸ばす。途中のアウェーのジャッジにも負けずに選手たちは粘ってDFに集中した。

後半も、DFが機能して、山口（高知中央）の速攻や石田のカットインシュート、榎本・蔦谷で加点。あとは中谷（金沢市工）の鮮やかなステップシュートを決めて今大会初勝利を収める。

■8月27日（月）
日本　29（16－9、13－16）25　中国
【得点】蔦谷・久保寺8、榎本4、佐藤3、山口2、中谷・石田・吉田・田中1

2位をかけた一戦。さらに最終ゲームとなるので、今大会全員得点を目標に設定してモチベーションを強くもって良い緊張感で臨んだ。個々が高く、左利きのロング・ミドルはコンタクトする、ポストは日本リーグ並みの体つきであるので、落ちたら密集するという約束事の徹底する6：0DFで対応した。高木（市川）の好セーブが連発してチームに活気を与え、蔦谷、榎本の速攻などで流れをつかみ、久保寺のミドルなども決まり前半終了。

後半、DFを再確認し、前半同様に6：0DFで対応。山口、吉田の3枚目DFと久保寺・蔦谷の2枚目DFが上手く機能して、ほぼシャットアウト。残り15分「全員得点を目標」にメンバーチェンジ。退場者が出たり、イージーミスからの失点などの状況で中国チームに追い上げられたが、勝負ありの状態であり、全選手がポジションが変わってでも出場することを優先して国際試合を経験することができた。

最後になりますが、この日韓中・高校日本代表での経験が今後の彼らのハンドボール人生に大きな財産となることを願うと共に、次のステップでもより一層努力し、益々精進して、将来オリンピック等世界の舞台で活躍してくれることを期待してまとめとします。

男子チーム主将　榎本 悠雅（藤代紫水高校）

8月23日から29日までの7日間、全国から集められた選手達で日韓中ジュニア交流競技会に参加しました。直前の20日から22日までの3日間は味の素ナショナルトレーニングセンターで事前合宿がありました。ユース代表の選手が多い中、みんなでコミュニケーションを取り合いながら、オフェンスやディフェンスの形を3日間という短い間で合わせることができました。

23日からは韓国へ移動し、25日初戦の韓国戦、前半の出だしでオフェンスでもディフェンスでも足が動かないまま6対20という大差がついてしまいました。ハーフタイムで自分たちがやるべきことを確認して臨み本来の力を発揮しましたが、結果は24対35と前半のリードをひっくり返すことができず、負けてしまいました。その夜のミーティングでは各項目の改善点や良かった点を洗い出し次の日の全南戦に臨みました。



2試合目の全南戦では前半からディフェンスから速攻が決まり12対9で折り返しました。後半もそのままの流れで試合を運ぶことができ、勝利することができました。

そして3試合目の中国戦、相手のポストと左利きをマークして守ることができ、自分たちの試合運びに持って行くことができました。また、今回全員得点という目標が達成でき、とても嬉しかったです。

結果は2位という残念な結果に終わってしまいましたが、世界で活躍するためにはこのようなチームと対峙しなくてはいけないということを改めて肌で感じることができました。

最後に、事前合宿から大会まで携わってくださった関係者の皆様に感謝の気持ちを申し上げ、これからもこの経験を生かし、次のステージでも頑張って行きたいと思います。

男子チーム副主将　蔦谷 大雅（大体大浪商高校）

日韓中を経験して思ったことは、少ない練習の中でいかにコミュニケーションをとり、質の高い練習を行えるかと、チームとしての役割を認識しどれだけチーム力を上げられるかだと思います。

試合を振り返って韓国戦は前半が終了したところでゲームは韓国大量リードで負けていました。これではだめだとチームで話をし、もう一度点差を縮めることと試合を楽しんで結果を出そうと意識しプレーしたところ、点差を縮められましたが結果は負けてしまいました。交流戦でしたがとても悔しかったのを覚えています。





地元全羅南道戦は昨日のようにはならないようにとミーティングをし、ミドルシュートやサイドシュートを増やし、確率のいいところでの得点をしっかりできたので勝つことができました。

中国戦は日韓中でできる最後の試合だったのでみんなの気持ちもスタッフの気持ちも一つになり、試合に臨みました。前日から中国の試合を観ていたので、どんな攻めや守りをするかがわかっていたのでスムーズにゲーム運びができました。後半は相手が少し弱気になったところで試合を決める流れを感じ、チームで盛り上げて得点を増やしラスト 10 分までにはかなり点差をつけることができました。そして目標であった全員得点が達成しました。

優勝こそ逃しましたが結果的にはそれぞれが次のステージへ進む良い経験ができたと思います。副主将を任される人はあたりまえのことをしっかり意識してチームを盛り上げるのが大事だと思います。

女子チーム監督　本田 眞吾
（神奈川県立上鶴間高等学校）

今年度の大会は韓国麗水市（全羅南道）での開催でした。韓国では、今大会を韓・中・日という表現で進めていきます。2012 年に麗水国際博覧会（万国博覧会）が開催された場所であり、歴史的には、朝鮮水軍の英雄　李舜臣（イ スンシン）の活躍した地でもあります。

今大会に際して 4 月 21 日（土）、22 日（日）に大阪堺市家原大池体育館にて選手選考会を実施しました。全国各地から女子 47 名の参加をいただき、初日は体力測定、面接、基本技能、2 日目はゲームを行い、14 名を選考させていただきました。選考に当たりご理解、ご協力いただき、選手を派遣していただきました各学校の顧問の先生方、また、選考会の開催を毎年受けていただき、ご協力いただいた大阪高体連専門部の皆さん、そして、選考にあたられた選考委員の先生方には、厚くお礼申しあげます。

本年度は、事前の合宿を味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）において行うことができました。20 日（月）から 22 日（水）の 2 泊 3 日、専用施設での合宿は、多種目の日本代表と共存することで選手の意識も高められ、練習は基より食事、生活全般まで日本代表としての勉強をさせていただきました。

合宿では、佼成学園女子高等学校、日本体育大学、埼玉栄高等学校の協力を得て、全国からの選抜された選手を、個人のポジションを最優先に考え、ゲーム中心の練習を組みチーム作りを行ないました。

20 日（月）午後 12：30 集合。13：00 から説明（NTC 利用上）終了後練習開始。基本練習の後に佼成学園女子高等学校とゲームを行ない 16：50 ダウン。21 日（火）1 日、日本体育大学､埼玉栄高等学校 3 校での練習試合。22 日(水) 9：00 から全体ミーティング、9：15 から練習。大会に向けての個人、チーム練習。11：00 ダウンで終了。課題は、選手の DF・OF における意思疎通の形成でしたが、やはり時間が必要でした。まずは、生活行動を共にし、それぞれを知ることで、この大会の競技期間中に合わせて行く事を目標として NTC から成田へ移動しました。

佼成学園女子の石川先生、安藤先生、日本体育大学の髙橋コーチ、埼玉栄の久野先生、ご協力ありがとうございました。

今大会の参加チームは、日本、韓国、中国、全南の 4 チームで、総当りのリーグ戦となります。

女子については、今年度、第 7 回世界ユース選手権大会が 8 月 7 日から 19 日までポーランドで行なわれていました。韓国、中国、全南共にそのメンバーが含まれていました。

韓国（女子）は黄池情報産業高等学校（韓国№ 1）でした。中国は広東省の学校（単独チーム）で全南は全羅南道地区で№ 1 のチーム(韓国ではベスト 10 の内に入る)の参加でした。各チームの状況から高いレベルでのゲームとなることが期待されました。

■8月25日(土)10:00〜:全南大学麗水キャンパス体育館
日本　26（13 − 13、13 − 14）27　韓国

先発は、GK No.1 田村、No.3 瀧川、No.4 植松、No.5 守屋、No.8 岡、No.9 中園、No.14 瀧石の布陣で入りました。立ち上がり、両チーム硬さが見られる中、47 秒に No.14 瀧石のシュートに始まり、1 点を取り合うゲーム展開となりました。8 分で 3 対 4 とリードされはしたものの、一進一退の攻防で、25 分では 10 対 10 となりました。ここまで心配されていた日本の DF は、時間の経過と共に機能し始め、韓国のスピード、コンタクトに対応し、韓国のプレーを苦しめ、また、GK 田村の好セーブもあり同等の戦いに持っていくことができていました。前半終了時、13 対 13 と同点の戦いをしていました。

後半に入っても、お互いの特徴を出し 1 点を争う展開が続きました。点差は 1 点でお互いがリードしたり、されたりで 9 分 44 秒に No.8 岡のシュートが決まり 19 対 18 とリードすると、韓国が先に作戦タイムをとる場面もありました。10 分以降 1 点を争う展開で、19 分 27 秒に No.5 守屋の韓国パススティールからの得点で 23 対 23 としました。23 分過ぎには日本のシュートミスから韓国 No.23 に速攻を決められ 23 対 25 で 2 点差となり 29 分 39 秒 No.13 立石のサイドシュートで 26 対 27 とし、残り 10 秒で作戦タイム。その後、フリースローからパスを繋ぎ、残り 3 秒でエース No.3 瀧川がミドルシュートを放ちましたが枠を捉えきれず 1 点差で惜敗となりました。この試合、韓国 OF の個人



技、フェイント対策としてDFを2・1・3とし行ないました。選手はよく対応し頑張ってくれました。何とかリードを2点、3点と心がけてやりましたが、一歩届かず敗戦となりました。しかしながら、次の試合向けて良い流れを作れたゲームだったと思います。

■8月26日(日)14:00〜:全南大学麗水キャンパス体育館
日本　21（12－8、9－13）21　全南

本日の相手は全南No.1のチームで、昨日の韓国代表とは力の差があることはわかっているところでした。前日の夜のミーティングで、韓国戦の敗戦をチームとして反省し、全南戦の作戦を確認し試合に臨みました。

試合は、No.12下馬場GK、No.2和知、No.3瀧川、No.4植松、No.5守屋、No.9中園、No.11口田の先発で入りました。試合開始後は、韓国戦と同じく、まだ多少の硬さが見られましたが、No.11口田のミドル No.2和知のサイドシュート、No.14瀧石の速攻で10分には4対2、15分経過時には、No.4植松のシュートで6対4としました。それ以降、21分No.3瀧川のスチールからNo.14瀧石の速攻、No.13立石のポストシュート、No.5守屋のシュート、No.1田村GKの好セーブで前半を12対8と4点リードで折り返しました。

後半は、立ち上がりからリズムをつかめず、11分経過で14対11となり、お互い等が続く中20分で18対14とし、そこからリズムが悪くなり、27分16秒、全南No.17エースの速攻で19対19と追いつかれ、それまでリードを保っていましたが、28分25秒No.10に決められリードを許しました。直ぐにエースNo.3瀧川のカットインで同点とするも、全南No.21に決められ1点差。残り17秒で作戦タイムを申請し、その後フリースローからパスを回し、残り9秒でNo.5守屋のロングシートが決まり同点で終了となりました。



試合としては、十分勝ちにいけた試合だと考えられますが、全体を通してメンタルの強さを考えさせられる試合でした。

■8月27日(月)14:00〜:全南大学麗水キャンパス体育館
日本　29（13－11、16－8）20　中国

いよいよ最終戦、中国との対戦となりました。昨日の全南戦、なんとも納得のいかない試合を、この中国戦で自分たちの力を表現すること、全員で勝ちにいくことを確認し、試合に向かいました。この日はウォーミングアップから、ひとり一人が意志を強く持ち、声を出し、中国戦に向けてのメンタル作りはしっかりと表現出来ていました。韓国戦、全南戦とは違った意識がそこにありました。

試合は、No.1田村GK、No.3瀧川、No.4植松、No.5守屋、No.8岡、No.9中園、No.14瀧石を先発としました。最初から日本のペースを作りリードしながら1点を取り、1点を守るという1プレー、1プレーを大切にしながら進めて行きました。この試合は、No.14瀧石のフォーメーションシュートからまり、中国No.7のシュートで1対1。その後は離れそうで離せない展開で、10分で7対7の同点でした。中国戦も我慢の試合となりましたが、韓国、全南の時よりは意識も高く、全員が声を掛け合いながらプレーをしていました。前半ミスも多くありましたが、No.12下馬場GKの好セーブもあり、前半は13対12点リードで折り返しました。前半の戦いで出来てないところOF、DFの確認を行い後半戦へ。

後半は、瀧川LB、植松CB、守屋RBの動き,パス回しが機能し、OFのリズムが良くなり15分過ぎには22対17と5点リードとなりました。同時にこれまでやってきたDFも機能し20分にNo.13立石の速攻で26対18となり、そこからNo.7橋戸のポストシュート、No.6高山のミドルシュートで盛り上がり、全員体制で試合を運び、最終的には29

対20で勝利しました。

今大会の結果は、韓国3勝、日本1勝1分1敗、全南1勝1分1敗、中国3敗という結果でした。

毎年のごとく選考会を行う上で、その年の全国の高校生を推薦いただき、この大会へ協力していただけることに感謝を申し上げます。ありがとうございます。大会を通して、思うことは、毎年確実に、フィジカル、テクニック等は韓国のチームと同等に戦える要素を十分に持ちえているものと実感しています。これも推薦いただいた先生方の、日頃からの指導の賜物と考えています。戦う時に必要な、チームとしての成り立ちを短期間で作ることは本当に難しいと考えています。今大会、韓国戦では、ひとり一人が遠慮しがちに練習し、試合ではいつもどおりやっているつもりでも、意志の疎通がない限りプレーにはミスが多くでて、特に力強さが見られないことが多くあったようです。しかしながら、1日1日積み重ね、ひとり一人が意識を持って努力することで、会話が生まれ、意志の疎通が見えてくることがようやくわかったところで大会が終了となりました。この大会を経て、各チームに戻りその経験を伝え、これからのそれぞれのハンドボールライフに役立ててもらえればと考えています。毎年大会に参加しながら結果が出せないことが不甲斐無いところではありますが、この大会に選抜され参加した選手の方々には、今後共にハンドボールを担う競技者として更なる努力をし、上を目指して頑張っていただくことを願い、結びの言葉、贈る言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

女子チーム主将　瀧川 璃紗（佼成学園女子高校）

8月20日からナショナルトレーニングセンターで強化合宿をさせて頂き、韓国で行われた第26回日韓中ジュニア交流競技会に参加させて頂きました。最初は、連携等上手くいかないことの方が多かったのですが、そのようなことも乗り越えながら大会を迎えました。

初戦は韓国とでした。結果は26対27で負けてしまったのですが、前半から自分たちの力を出して相手に流れがいっても食らいついて粘り強く試合をすることが出来ました。

二戦目は開催地の全羅南道とやりました。前半は12対8とリードしていたのですが、後半に自分たちの足が止まり大事なところでミスをしてしまい、勝ちきれる試合を21対21の同点で終わってしまいました。

この試合があったからこそ、三戦目の中国戦では力を出してやりきろうとアップから試合にかける思いを出して臨みました。思うように点差が開かず苦しい時間が長かったのですが、チームの一体感で乗り越えられ、29対20で勝ちきることができました。

この大会を通して、短い時間でのチーム作りではありましたが、一人一人がチームプレーを第一に考えて実行し、3試合終わってみて連携の取れた本当に良いチームで戦うことが出来たと感じています。個人的には、今までとは違った経験をさせて頂くことが出来て、努力不足だと感じることが多く、



自分の弱さも明確になった交流競技会となりました。この経験を今後のハンドボール人生に生かしていきたいと思います。また、初めて国際大会に出る選手がほとんどで、外国の選手からたくさんの刺激を受けたり、アウェーの笛を体感したり、生活面でも慣れないことがたくさんあったりしましたが、今後に繋がる貴重な経験をさせて頂きました。このような経験をすることが出来ましたのも先生方やこの大会に関わって下さった皆様のお陰様です。本当にありがとうございました。

女子チーム副主将　瀧石 涼伽（洛北高校）

8月20日から29日まで日韓中ジュニア交流競大会に参加させていただきました。試合までにチームで合わせたのは3日間ということもあり、不安が大きく、もう少し合わせたかったという気持ちが多い中で自分達は試合に臨みました。

今年は初戦から韓国代表と試合をしました。韓国代表は、シュートのスピードやゲームメイクなど日本とは違いました。アウェーでの試合で審判の笛を吹くタイミングなどが韓国寄りの場面が多く、そこにとらわれないようにしないといけないと強く感じさせられました。

開催地の全羅南道戦も、勝つことができず同点で終わってしまいました。その日はアップの時からチーム全体の声が小さく、試合前とは思えないような雰囲気で試合を迎えてしまいました。それが結果として出てしまったのだと思います。その夜、みんなでミーティングをして明日の中国戦では今日のような姿を先生方に見せず全員でアップから全力でしようという話になり全員の顔つきが変わりました。

このチームで戦う最後の試合。2位をとって日本に帰ろうとみんなで決めて迎えた試合でした。試合では、ベンチも一体となり、得点を重ねる度に全員で喜ぶことができ、この試合が3試合の中で最もひとつになれたと感じた試合でした。初めて合わせた時は個人の集まりで、やる事も全員がバラバラとなっていましたが、全羅南道戦をきっかけに個人の集まりが1つのチームになったと感じます。また、この日韓中を通して、初めて会った人達でも同じ目標に向かって進めばチームになれるのだと改めて気付かされました。またこういった機会があれば参加したいです。

最後にここまでお世話になった本田先生、中山先生に感謝しこれからもそれぞれの場所で頑張ります。ありがとうございました。

第10回日韓小学生ハンドボール親善交流会



期　間　2018年8月22日(水)～26日(日)
会　場　大韓民国(済州島)西帰浦市ゴンチョンポ遠征訓練センター内多目的体育館
参加者　(公財)日本ハンドボール協会ホームページ参照
結　果

8月23日(木)

【公式戦】	男子	日本代表	17－15	韓国代表
	女子	日本代表	18－15	韓国代表
【交流戦】	女子	日本代表	22－ 9	韓国代表
	男子	日本代表	15－20	韓国代表

8月24日(金)

【交流戦】	男子	日本代表	11－13	韓国代表
	女子	日本代表	16－ 5	韓国代表
	女子	日本代表	21－10	韓国代表
	男子	日本代表	17－22	韓国代表

事業総括

団長　**児玉 浩三郎**

【8月22日(水)】今回の選手団は、長崎県・佐賀県・福岡県・大分県の北部九州４県から推薦された男子 15 名・女子 15 名：計 30 名、スタッフ８名の総計 38 名の派遣となった。台風 19 号の北上に伴い、出発前から予定航空便の離発着が心配だったが、福岡国際空港から釜山空港経由で済州島に到着した。空港からホテルまでのバス車中では、昼食を食べたり、出し物の歌を歌ったりして、終始リラックスした雰囲気だった。ホテル到着後からは、台風 19 号が済州島を直撃し、夜から周囲は危険な暴風雨となった。

【8月23日(木)～24日(金)】台風 19 号が済州島を直撃し、競技実施が危ぶまれたが、ホテルから体育館までの移動や施設の安全を確認し、予定通り競技を実施した。初日は、韓国の指導スタッフによる合同練習を行った。前日の和やかな夕食時の雰囲気とは一変し、韓国選手団がコートに立つと、目の色が変わり練習に臨もうとする姿勢は、日本の選手たちが見習う点だった。トレーニングの内容は、フットワークが中心だった。日本の選手たちは、こんなに長時間かけてフットワークをしたことは初めての経験だっただろう。時間をかけて、攻撃にも守備にも通じる基礎的な「足さばき」を習得させることがジュニア期に重要であることを日本の指導スタッフは、改めて学ぶことができた。

　合同練習の後、公式戦を行った。男子も女子も最高のパフォーマンスで見事に勝利を収めてくれた。試合内容は、韓国の選手たちが基礎的フットワークに裏付けされた攻守両面に鋭いプレーを発揮していたものの、日本の選手たちも決して負けないレベルの高いパフォーマンスを発揮していた。日本選手団の公式戦（初戦）にかける意気込みが、勝利を呼び込んだ。今回の選手団は、長崎県・佐賀県・福岡県・大分県から推薦された意識も技能も高い選手が集まり、４月より定期的に練習会を行ったり、強化合宿を行ったりして派遣に備えてきた。九州各県協会や所属チームの理解があってこそ誕生したチームだったので、その成果が「韓国に勝利する」という最高の結果となったことをたいへん嬉しく思う。

【8月25日(土)】台風の通過に伴い、競技を連続二日間で実施し、その後、台風一過の晴天を期待して最終日に観光日が設定された。韓国最南端の離島である馬羅島（マラド）に渡り、自然豊かな風景を満喫した。午後からは、ホテル近くの市場（商店街）に出向き、日本と韓国の選手が混合グループになり、ショッピングを楽しんだ。競技２日間と観光日が終わった後は、フェアウェルパーティーが開催された。会食前から韓国選手のダンスや歌で盛り上がり、日本選手団も韓国民謡「アリラン」（ポップ版）を披露した。その後、高揚した雰囲気で会食となり、最後には、韓国選手団と日本選手団とが一緒にＫポップを歌ったり踊ったりして楽しい時間を過ごした。ステージ上で繰り広げられた日韓共同の即興出し物は、まさに「親善」の名にふさわしい会の締めくくりとなった。

日韓小学生ハンドボール親善交流会を終えて

日本選手団男子監督　幡東 忠則

　はじめに、派遣にあたりご尽力いただきました日本ハンドボール協会、並びに九州ハンドボール協会、また、関係者の皆様方に心よりお礼申し上げます。
　４月に初めて招集されて出会った選手たちは、熱意に満ち溢れていました。４月以降、月１回の練習と派遣前の合宿を通し、個人や集団の良い所が多く見られるようになり、チームとして成長していきました。
　公式戦では、挑戦者の気持ちを忘れず、また用意周到に戦術確認を行いました。試合全体を通して選手たちの集中力が持続でき、試合開始から終始リードしたゲーム展開で韓国に勝利しました。親善の面では、各パーティーや試合を通して、選手たちはすぐに打ち解け、楽しいムードをつくっていました。
　この日韓親善交流会を終えた後でも、日韓の友情が継続し、両国の選手たちが成長過程の各カテゴリーで活躍することを期待します。私自身も地域の子どもたちへの普及育成と所属チームの技術及び人間力の強化に努めます。最後に、素晴らしい選手と最高のスタッフで挑戦できたことを感謝しています。ありがとうございました。

日本選手団男子主将　石川 司堂

　長崎県・佐賀県・福岡県・そして僕の所属する大分県からなる北部九州合同選抜チームに参加する事ができました。４月より練習がスタートし、出発前には合宿もありました。最初はコミュニケーションをうまくとれませんでしたが、練習を重ねていく度に、打ち解けるようになりました。しかも、僕はキャプテンをさせてもらいました。
　韓国の選手は、背が高く強そうだと感じました。試合では、思うように守れなかったし、しかも体勢を崩してまでシュートに行こうとすることに感心しました。僕もそんなプレーヤーになりたいと思いました。
　このような経験ができた事は、一生の宝物です。そして、これからもハンドボールを続ける上で、もっと上を目指していくよう、自分自身で日々練習に励んでいこうと思いました。

日本選手団女子監督　土岐 克敏

　昨年の長崎県選手団総監督として、この交流会に関わらせていただいてから、あっという間に一年が過ぎまし











た。今年は「派遣」ということで、北部九州４県で選抜チームをつくり韓国へ行って来ました。

今年の女子チームは、比較的に体格がよく、韓国選手の当たりの強さにも負けずに戦うことができました。全試合を通して、安定したディフェンス力で韓国チームの攻撃を封じることができました。残念ながら、目標としていた「全員得点」を達成することはできませんでしたが、全員がコートに立ち国際試合を経験できたことは、今後を見据えたうえで大きな成果があったと思います。

試合後のミーティングでは、選手たちから「もう一度ジャパンを背負って、韓国の選手たちと試合をしたい！」との声が溢れました。日本に留まらず、国際試合を通して世界を視野に入れた子どもたちの目は、本当に輝いていました。

日本選手団女子主将　外口 彩奈

小学校最後の夏、私は一生の思い出に残る貴重な経験をしました。私たち日本代表チームは長崎県・福岡県・佐賀県・大分県より選抜された仲間で結成されました。5回の練習会や派遣前の強化合宿を通して、技術やチームワークを高めていき、韓国のチームに挑む準備をしてきました。初めての顔合わせでは、緊張して他チームの選手と話す事ができませんでしたが、練習を重ねるうちに徐々に打ち解け合い、一つのチームとしてまとまっていきました。また、韓国の選手は一人一人が、将来はオリンピック選手になりたいという強い意志を持っていると聞かされ、自分たちも将来を意識するきっかけにもなりました。

韓国の選手は、体が大きく、フェイントが速く、シュートコースも素晴らしいものでした。アップから声がとても出ていました。しかし、私たちは、そんな韓国選手に動じず、試合では、これまでの練習の成果を発揮する事ができ、全試合に勝利を収めることができました。

韓国の選手たちの素晴らしいところは、プレーだけでなく、とても気さくに声をかけてくれる親しみやすいところです。言葉は通じなくても、とても仲良くなる事ができました。

もうこの選抜メンバーで試合することができないのは寂しいけど、学んだ事の全てを各チームで活かして頑張りたいと思います。

最後に、素晴らしい経験をさせてくれた日本協会の先生方、指導してくれた先生方、一緒に頑張ってくれた仲間に感謝しています。私はハンドボールが最高に大好きです。











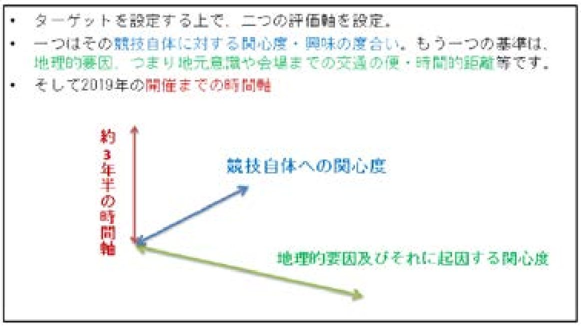
熊本通信

2019女子ハンドボール世界選手権大会の広報PR戦略

～事務局発足から開幕までの３年半の時間軸視点から～

熊本国際スポーツ大会推進事務局 総長特別補佐　吉開　裕

2016年４月の事務局発足以降、一貫して広報PRに携わっていますが、2019年までの広報プランを策定する為の第１回目の会議に臨んだ際、メンバーの皆さんからは「皆が欲しくなるようなPRグッズを作ろう！」「まずポスターだ」「ビルの壁面に広告を出す」「斬新なTVコマーシャルを作る」「電車のラッピングが目立つ」等々、多彩な意見がでました。個々のアイデアは興味深いものでしたが、系統だった戦略的な見解はあまり出なかったので、議論が一巡した後に、簡単な図を書いて広報プランの立て方を説明し、意見集約を図りました。本稿では実例を交えながらその考え方をご紹介したいと思います。



約３年半の広報プランを策定するにあたり、どの時期に、どこにフォーカスを当てて、コミュニケーションを取るか、このターゲットを設定する上で、二つの評価軸を設定しました。

一つはその競技自体に対する関心度・興味の度合い。

もう一つの基準は、地理的要因に起因する興味の度合い、例えば地元意識や地域特性等です。

この２つに加えて必要なのが、３年半の時間軸です。（図１参照）

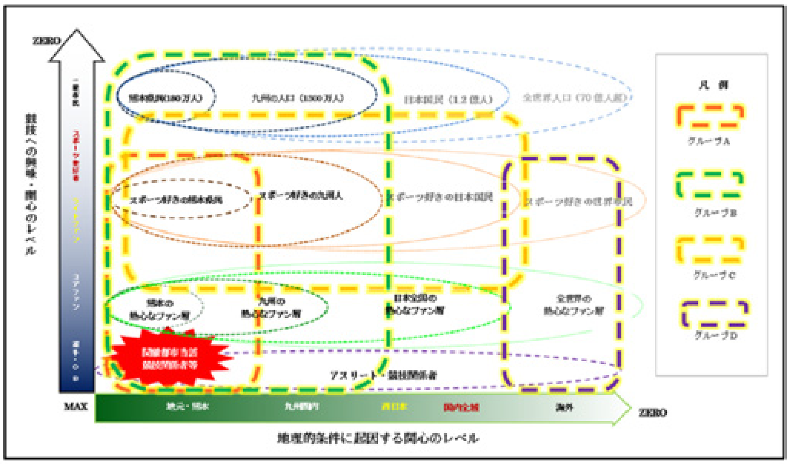


図２は、２つの評価軸によるセグメントを詳細に記載したものです。

前述の様に縦軸は競技への関心度を評価軸にしたもので MAX 部分には関係者やトップアスリートがおり、次に一般選手や過去の競技経験者、次いで熱心なファンやサポーター、競技者の家族・縁者・友人、それに続いてスポーツ好きな一般市民、さらに興味ゼロ（無関心層）へと色が次第に薄くなっています。

なお、この「無関心層」は現在は仮に無関心であったとしても、固定化された人達ではありません。

かなりの流動性があり状況によっては「俄かファン」にもなり得る層を含んでいます。

2015年のラグビーW杯の後に起こった五郎丸現象がその一例です。

横軸は、地理的条件による評価軸で、開催都市（熊本）、九州、西日本、全国、アジア、全世界の順です。「地元で開催されるならば応援しよう！」そのような方もおられるし、それほどにファンではないけど、距離的に近いし、観光がてらに１泊位で行けるのであれば、観戦しに行って見ようかな…そのようなケースを視野に入れています。

左下の赤いスパークマークのエリアが最も関心の高い層です。開催都市関係者であり、その競技の上級経験者またはその両方に属する方々です。これは全体から見れば少数派かと思います。しかしこの熱量のレベルが周囲への波及力の強弱を決めるとも言えます。

次にその右上側へと拡がる層、その種目の競技者や熱心なファンで熊本県内在住者がきます。これが集客のコアとなる層で、グループＡとしました。まず、ここへの徹底した周知活動は必須としました。

次にその競技に対する興味の度合いは様々なものの、「地元開催」「九州圏内開催」と言うことに意義を見出す層がおられるかと思います。またこの方々に対しては、自治体保有のメディア・地元メディアを通じた繰り返しの情報発信やイベント会場でのダイレクトなコミュニケーションが比較的容易であり、イメージの蓄積を図る上で効率性の高い集団です。これをグループＢとしました。

但し、ＡグループとＢグループのファン層だけではマーケット的にも限界があり裾野の広がりが十分とは言えませんので、コア層を固めつつ、それより右上側の層、つまりスポーツ全般に比較的興味のある層の攻略、更に言えばオピニオンリーダー、インフルエンサーという影響力のある人たちから、フォロアーと言われる「大勢の皆さん」をどれくらい巻き

込んで、裾野を広げることが出来るか？その裾野の拡大し得る可能性の高い部分をグループＣとします。この方々は「地域」というより「コミュニケーションツール」での繋がりが重要な要素となるグループです。これらへの周知活動に加え、海外向け情報発信を意識した取り組みも加えることを検討しました。それがグループＤです。訴求方法は、ピンポイント的には、熊本で試合を行う国々に絞った情報発信。面の展開としては、SNS やホームページや通信社の配信サービスの活用が挙げられます。

既存のマーケットをしっかりグリップした上で、新規のお客様獲得に向けた裾野を拡大するべく、諸々の活動をターゲットと最適なアプローチ手法を常に意識して、３年半のタイムスパンで進めて行くというのが「広報 PR 戦略のグランドデザイン」の基本方針としました。

初年度はハンドボールの主要な大会に PR ブースを設け、チラシ配布やフェイスツーフェイスでのコミュニケーションを図る等の活動を行ってコア層を固めつつ、カウントダウンボードやくまモン用のハンドボールポロシャツ制作等、最終年度まで使用する基本ツールの整備や体制固めに軸足を置きました。平行して、県職員や市職員の大会認知度の向上、無料の公共媒体を有効活用した PR 展開を進めました。





（左から）県庁前のプロムナード、スポーツ庁受付カウンター、くまモン誕生祭でポロシャツ披露



阿蘇くまもと空港待合室に掲出した大型タペストリー



デジタルサイネージを使ったカウントダウンボードを県庁と市役所に設置

2017 年度の取組みは本コーナー「熊本通信」の第１回で詳細に報告されているので、本稿では触れませんが、2017 年度以降は、初年度の取組みを継続しつつ、開催日程の接近に伴い節目となるタイミングを捉えての催事を企画、それを絡めてメディア展開の比率を徐々に拡大、TVCF を始めとした既存メディアの媒体広告に SNS 等のニューメディアを組合せたメディアミックスをより充実させ、開催年度に盛り上がりのピークを持っていく、と言う基本方針に沿って広報展開を進めております。

“「Hand in Hand」プロジェクト”

大会キャッチフレーズ「Hand in Hand　１つのボールが世界を結ぶ」にちなみ、大会の公式マスコットであるくまモンをデザインしたハンドボールが熊本県をスタートし、日本国内、さらには世界のハンドボールフレンドを次々結んでいく様子を、ニューメディアを通じ皆さんにお伝えしていきます。（画像左）





https://japanhandball2019.com/news/2018071808/

一方でこの活動を広く認知してもらう為既存メディアの皆さんにもご協力いただいています。（画像右）

世界トップレベルのプレーをより多くの方々にご覧頂き、その魅力を体感して貰える様に、2019 女子ハンドボール世界選手権大会の更なる認知度と理解度の向上に努めてまいります。ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。